

---

# ご懐妊

長崎秋緒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ご懐妊

### 【Nコード】

N0752E

### 【作者名】

長崎秋緒

### 【あらすじ】

ムツオはエイコとの同棲を始めてから、三ヶ月が経っていた。

食卓に意表をつく彼の好物が並んでいるのを、それほどにも喜べない訳は、塩鮭の焼けた、食欲をそそる脂っこい二オイに添え、彼女の口が、懐妊、とやけに古式な言葉をふちどるためだった。

彼女と付き合い始めてから、何回やったかを数えるうちに、一昨日の性交のことが彼の記憶にのぼり、何気ない調子でと、鮭の身を啄ばんだ箸先を口に入れる。

現実の精密に時間を刻んでいたことが、電池のきれた壁掛け時計にようやく関心をもたせ、思慮のないここ最近の性交は、高をくくり不徹底であつたと執拗にくやまれ、噛んだ鮭が冷たいことにより腹をたてた。

「これ、中が焼けてないよ」

じぶんのを箸で探り彼女もまずい表情をつくる。

「できたてだからゆるして」

無邪気に皿を受けとり台所に立つ彼女は、緩慢さが彼の鼻につくほど浮ついた調子で、鼻歌まじりに、ごかいにくん、をばらまいた。彼女はふんだんな水気にうるんだ眼で、涙こそなかったが、もうこれでもなにかも安心といった安堵の兆しさえ映し、菜箸をタクト代わりに遊ばせている。

「テレビでね、さっきやってたの、御懐妊のニュース」

彼は口をつぐんだまま、もう鮭を食べる気にはなれずに、ふりかけだけをおかずにごはんをすすめて、はやく腹を満たそうとかつこんだ。

もともと魚料理を好まない彼が、なにかの折に鮭だけは別だと言いついたのを、その時の、彼の大げさな言い方を疑わず彼女が信じてしまい、同棲をはじめて三カ月、ついに食卓に上った、唯一、口にできる魚を、これからは望んで食べることはないだろうと彼に思わせたのは、ほかでもない彼女の幸せそんな態度にあった。

「はいどうぞ」

彼に皿を手渡しイスにすわる際、彼女自身動作の雑だったことを省みて、いけない、大事に扱わなきゃね、と次は丁寧に座りなおす。「報告に行こうね」

報告、何の。彼女への挑発にもとられかねなかったが、それでも彼は気持ちの苛立ちには勝てないらしく、すぐには言葉を足さなかった。その瞬間思考を割って、市役所と婚姻届が頭に浮かんできたのには彼自身閉口した。しかし彼女には別の光景があったらしい。

「まず、お互いの実家に挨拶を済ませるのが先でしょ」

「ああ、うん……そうだな」

「なにその言い方、嬉しくないの」

「そっじゃない」

会話を途切れさせまいと彼は強引に次の言葉をつぐ。

「ただ、あんまり突然だったから、うまく父親になれるかなって……」

困惑の目をたるませ落ち着き払った口調で、大丈夫、ちゃんとパパになれるわ、きっと。

まだ責任が重苦しい彼に対して、彼女はしっかりと母親へ移る準備を怠ってはいなかった。

「ねえ、ベビー用品見に行かない。古着の安い子供服を置いてる店もあるんだって、友達が教えてくれたの」今度の日曜、仕事休みだから。派遣会社に登録して、働くことを覚えてから、彼女は一つのところに勤めることは考えなくなっていた。彼のバイト暮らしの影響もあった。

彼女は妊娠のことを彼に話す前日、すでに親しい友人全員に話し終えていた。彼はそのことで少し彼女を責めなくなったが、つまりない方向に話題がそれる状況をおもうと彼女に分がある。しかたなく、顔つきは曇らせたまま箸をおく。それを彼の「真面目さ」なのだと解した彼女の心中で、結婚はとくに下書きを済ませたものであるらしかった。彼女は畏まった口調で、

「いいタイミングだとおもわない？」

同じ時期の出産もありえると、ひとり納得する彼女が、指折り数える月日の満期に達したところで、視線を移し彼の同意を待つ。

「……ばかばかしい。それで俺達の子があのある人みたくなれるのかよ。同じ日に出産したらなんだってんだ……意味ないよ。だって七夕に産まれりゃ願いが叶うのか？ クリスマスに産まれたら神の子か？ そんなわけないだろ？ そんなの嫌だ」

「はあ？ なに勝手にキレてんの？ あんたが生でやったからできたんでしょ」

箸を叩きつけ彼女は立ち上がり、茶碗と皿を一つにまとめ、三角コーナーのポリ袋に食べ残したご飯と鮭と、同じ皿にあったキャベツの千切りをぶちまけ、洗面所に駆けていった。

うつむいて彼は、キャベツの千切りはないよな、と白い大皿に鮭の切り身とキャベツの千切りが一緒に並んでいるのを、今までどうして変に思わなかったのか不思議でしようがないのだと、彼女の捨てぜりふに乱されて、落ち着けない気持ちを鎮めようとしてか、無理に大皿に意識を集中させた。

そのうち洗面所から泣き腫らした彼女が、食器を洗いにくるタイミングに合わせ謝るつもりで構えていたが、彼の思惑に反し、キッチンから玄関につながる、人ひとり余裕を持って通れるだけの間隔で部屋を割る両壁は、うす汚れた箇所陰影を目立たせるばかりだった。

その、今日ではタバコのヤニで、黄色くまだらに濁ったアパートの二階に引越してきた当初は、昼光色の照明を見事なまでに跳ね返す白さで、眼が眩むほど壁紙は鮮やかさを保っていたのを、誇らしく彼女が夜ごと、「なんか暖かいよ、この部屋」とはしゃぐたび、彼に前向きな禁煙を、自発的に誓わせたものだったが、今ではいっさい我慢することなく、延々と煙で部屋を汚すのも自由にやれた。彼女からの風当たりは増すばかりだったが。

ようやく洗面所からでてきた彼女は、上半身の影だけを一度壁紙

に映したきり、彼に安易な期待を抱かせ、スツと暗がりに消えた。

二部屋の方のドアを開け閉めする音が止まったのを聴き、彼は諦めテーブルの食器を片づけにかかる。

茶碗と箸と皿は引越しの際彼女が揃えた物で、茶碗はかわいいネコの絵柄の淡いピンクと薄い青色の色違いで、箸も似たように色分けされたものを選んで買い、端がゆるやかに波うつ形の皿だけは、実家から持ち出したものらしく、彼女の趣味に合わないシンプルな白の単色だった。

彼はスポンジ製のたわしを片手に、台所用洗剤を逆さにして持ち、五滴ほど垂らし蛇口をひねる。予想外の冷水が指先にかかり身震いを起こす。洗ううちにコップがないことに気づき、今朝彼自身の不注意で割ってしまったことにもしかすると彼女の怒りの原因があるのではないか、だから代わりのコップを出さなかったんだな、せっかく仕事帰りにまわり道してまで買ってやったのに、包みも開けないなんておかしい。あいつの好きなキャラクターのだってちゃんと買ったっけ……、言わなかったかな……、そうだ鮭だ、それで忘れていたような気がする。

彼女の茶碗にスポンジをあてたまま首だけ横を向き、

「なあ、コップ、ウサギさんのヤツだぞ。見てみるよ」と招くように叫ぶ。

声は部屋中に響き渡り、やがて蛇口を勢いよく流れる水道水のしぶく音だけが残る。呼びかけに答える気配はなかった。

職場の遊び仲間の家で、彼はムシャクシャする思いから、そこで夕飯を済ませ、ビールまで飲んでいた。

二時間もあれば缶ビール二杯程度の酔いは醒めるだろうと考え、彼女に連絡もせずに深夜まで飲み、結局今日は帰るのが無理だとタカアキの両親がしつこく勧めるのもあって、その家に泊まることに決まった。その後も彼女への連絡はしなかったし、彼の携帯電話にも反応はなかった。

翌日は五時に起床しなければならなかったから、彼も、タカアキも、まだ酔いの覚めやらぬ内に、腫れぼったい瞼をしきりにこすりながらなんとか起きた。

タカアキが、ムツちゃんの車で行こうといい、ムツオもそれに異論はなかった。ムツオの四駆はエンジンのかかりが悪く、一度市街地で止まったままどうやってもフ力なくなった時があった。その時にも助手席にはタカアキが乗っていた。

今週は郊外の現場が続いていたので、ムツオは寝不足ぎみだったけれども、昨夜のアルコールで数日ぶりに深い眠りにつくことができ、今朝は早起きにもかかわらず、気分はすこぶる良かった。それとは対照的なタカアキの不機嫌に外を睨みつける様子が、いきなり豹変した失笑を車内に響かせた。

「おい、ムツちゃん見ろ、早く。あのじいさんおもしれえ、あは、あはは」

タカアキの指し示す方向にあわてても間にあわなかった運転中のムツオは、そのとき、引き返してやろうという、いつもの下卑た好奇心は、どういうわけか生じなかった。

タカアキの説明によると、どうやら散歩中のじいさんが連れていた、秋田犬らしき犬の首輪につないでいた、散歩用のヒモにじいさんが足を絡ませ、うしろ向きの姿勢で横断歩道の手前に倒れていた

そうだ。

じいさんのその倒れ方が、タカアキによれば、「マジ、ウケた」  
そうで、さらに仰向けに倒れたじいさんは、両手を伸ばし、両足は  
膝を直角に曲げたまま、なにか見えないものにも抱きつく格好で、  
タカアキの視界から完全に遠ざかるまでぴくりもしなかったらし  
い。

それを聞いて、はじめは単純におもしろがっていたムツオも、些  
細なことを、誇張する気質のタカアキのことだから、全部を信じる  
つもりにはなれなかった。ほとんどがタカアキの創作によることに  
違いない。笑った後の気安さからか、それでタカアキをからかつ  
た。

「どのくらい嘘ついた？　じいさんが転んだまでが本当だろ？」

頬をくねらせタカアキは、にやりと細目で薄笑いして、

「全部だよ、全部本当だって。じいさん倒れたあと犬に踏んづけら  
れてたし」

「ばーか、ありえないよそんなこと、出来すぎてるって」

「何でだよ、おれたちが帰ってくる時もあのままでいるかもよ？」

「……もういいって」

二人とも、妙な気まずさに黙り会話もとぎれた。

それから現場までの道程は、ムツオに一時間という長さを、退屈  
させない山積みの問題に取り組む機会を与え、車外の光景を、一々  
無垢な好奇心の眼差しで眺め、安全靴を踏み鳴らし、同意を求める  
タカアキの声にも無反応を示すほどだった。

重たい車体につりあわない、パワー不足のエンジンが不満とばか  
りに、アクセルを踏む足に力を込めるけれども、過度の負担をかけ  
た、高回転で噴きあがる排気量が、燃費に直結するだけなのは、ム  
ツオには痛いほど分かりすぎていた。しかし、アクセルを踏み込み、  
エンジンを締めつけてやりたい衝動は抑えがたくムツオを駆り立て  
る。

金融会社への、毎月の支払いにも、最近は渋りがちで、期限当日に



ようやく振込みを済ませることが多くなっていた。

「おい、行き過ぎたぞ」

ムツオの肩を掴んで激しく揺すり、タカアキがしっかりしろよ、と舌打ちする。

「次の信号で右折すればいい」

「いや、その脇道から入ったほうが近い」

タカアキは人家の立ち並ぶ間の道を行こうと急かしたが、ムツオは信号のない場所で右折するのを、反対側の車線の込み具合を理由に拒んだ。

反対側の車線は、都市部へ向かう車の列により、ムツオたちの視界にうんざりする渋滞を築いていた。ムツオ達の走る車線も今は後方に列を成しつつ、車幅の間隔は自然と狭まってきた。

ふと、ムツオは考えが変わり、百メートルほど先にある、交差点の信号を待たず右折するために、タカアキの言った脇道の手前で停車し、片側二車線の狭い道路に、強引に割り込みもうひとつの渋滞を招くことを、今は別段戸惑いもしていなかった。反対車線の男がこちらを睨みつけている。ムツオは目線を逸らし、素知らぬふりをする。

ムツオが進路に逆らい車の列に割り込み進む際、歩道を小学生が横切って行った。エイコのことが思い浮かび、ハンドルを握る手がゆるみ、反対車線から来る車と接触しそうになったが、タカアキは驚く様子も見せず、何も言わず車外を眺めているだけだった。ムツオも黙ったまま脇道を抜け、本線に戻りそこからは順調に進んで行く。

現場までもう少しという所で、再び渋滞に巻き込まれ、信号待ちでいらつくムツオの前を、新社会人らしき若者が、ぎこちないスーツ姿で、自転車のペダルをきびきびと腿を上下させてこぐ様子が、歩行者の集団に紛れ横切っていった。

その若者を目で追いかけて、本当だったら今頃自分も大学を卒業し、まっさらな社会人としての生活を始めているはずだった、と父親の

ことを思い出す。

大学受験に失敗したムツオに父は浪人することを許してはくれなかった。父が学歴にコンプレックスを持っていることは、こどもの頃から、度々自身の第一志望であった大学出身の芸能人を理由なく貶すことから窺い知れていた。そこまで学歴にこだわる父が自分に浪人することを許さなかったのが、ムツオにとっては最悪の誤算だった。

一年くらいなら大丈夫だろうといった甘い考えから、受験勉強にも本腰を入れず、本番の結果は惨憺たるものだった。六つ受けた大学の中には、クラスの連中とバカにしていた大学もあった。そこにすら受からなかったムツオを、その時ばかりは友人も茶化さなかった。最後に受けた試験の結果が出た夜、ムツオは父と殴り合いの喧嘩をした。あわてふためく母親が、ようやく仲裁に割って入ってきた時、ムツオは父に組み敷かれる格好でいた。父親が立ち上がり、鼻血で呼吸がうまく出来ず咳き込むムツオを見下ろしていった。

「お前に掛ける金はもうない」と。

高校を卒業して新聞奨学生という形で、ムツオは実家から遠く離れた専門学校に入学した。専門学校で特にやりたいことなどあるわけではなかった。父親の嫌うブルーカラーの仕事に就いてやれといった反抗心から、その学校を選んだ。目的もなく実家を離れたその日、空港に見送りに来てくれたのは母親一人で、

「お父さんも本当はあなたのことを心配してるのよ」

そう涙ながらに訴える母に免じ、その場はあえて反論はしないでいた。

「じゃまだなこいつら……」

タカアキが呟いた。このまま突っ込んでやろうか、とムツオが訊く。

「おお、やれ、やれ」とタカアキが煽るように両足をばたつかせる。当分前へは進めそうになかった。ギアをパーキングに入れ、サイドブレーキを引き、靴底をブレーキから離す。車体が完全に停止す

る直前の揺れのあと、息をつきシートにだらしく凭れる。

再び黄色の点滅が始まると、後から来た歩行者は駆け足になり、ムツオの正面に見える信号の点滅が終わる寸前で皆渡りきる。人も車も一時的に流れが止まり、次の瞬間、全ての信号が同時に緑色に変わった。

助手席のタカアキが伸びとともに大きなあくびを車内に広げ、うつすら涙を溜めた眼を、退屈そうに車窓へ遣りなにか呟いている。

雨が降りそうな曇天の薄暗さがあった。昼までに降ってくれれば親方が早く仕事を切り上げるはずだ、とタカアキが目尻をおさえ媚びた薄笑いを浮かべた。

そうなれば早く家に帰ることになるから、ムツオはどしゃ降りでもいいから、いつも通り六時までは足場組みに没頭して、父とエィコとのことを頭から追いやってしまいたかった。

### 三

二日連続で雨は降り続き、昨日の仕事はタカアキの予想どおり、たいして作業もはかどらず昼前におわった。

昼飯も食わず引きあげるムツオ達を呼び止め大工が、早く足場を組んでくれないとこっちの仕事にひびくと、来月中には建て終える予定になっていることをしきりに口にだし咎めた。

建築の完成予定というのは大工のもっともな言い分ではあったが、この仕事にまだ慣れていないムツオには、さして問題にならなかった。どうせいつまでもそこで働くつもりもないのだし、足場を組むだけが自分の職域であって、大工や左官の仕事に支障をきたそうが、自分はひたすら足場さえ組めば給料を貰えるのだから、それでいいと考えていたので、とくに偉そうな物言いの大工には、私情からくる嫌悪感もあり、何を言われてもとりあわないようにしていた。

ある日、二階から金づちが落ちてきた際にも、それがあの大工の醜くたるんだ下腹にまかれた釘袋からこぼれた物だと分かった、頭上から薄毛の下、赤く日焼けした皮膚を照らした大工が、ボウズ、すまん、投げてくれ、と何度声をかけようが、傍で見ていた親方に命令されるまでは、大工の握った金づちの柄を、ムツオが自らの意思で握ることはなかった。

それからは大工の方でも、ムツオを嫌っているかのような態度を隠しめせず見せていた。

その大工の顔を今日は見なくてすむのだと思えば、普段なら塞いでしまう雨音にも、隣に住む親子の、母親が十歳になる息子を叱りつける大声ほど気にならないでいられた。

二部屋ある六畳間のベランダ側をムツオの自室としていた。そこはちょうど隣の住人が居間に使っているらしきところに、壁一枚で接していた。壁はセメントで固められたただけのもので、さわると光沢のある砂利が指に残り手抜きのようにもみえるのが、築四十年と

聞けば納得もできた。そのセメントの壁をやすやすと突き破り、隣の住人の罵声はムツオの耳にはつきり届いてくる。

隣の三十六歳になるという母親の気違いじみた叫びが昼夜問わずに行われることを知っていたら、いくら家賃が安いからといってもムツオは引越し先にそのアパートを選ばなかった、とエイコと二人悔やみもした。

エイコの話によると、隣の住人は病院の事務をしている母親と、小学四年生になる息子の二人暮らしで、夫と離婚して二年が経った現在では子供を引き取ったことをひどく後悔するふうなことを、買い物帰りのエイコに玄関口で長々と漏らしたことがあったらしい。

ムツオはその隣人を密かに毛嫌い、冷淡な態度を守っていたが、十歳の息子には比較的好意を持って接することができていた。それには同情が大半を占めた感情がこめられていたからで、その男の子のためにと、仕事帰りにお菓子を買ってきたことも何度があった。

ただ、ムツオにはその親子を理解できないところがあり、その一つには、十歳の男の子は言葉も丁寧で、敬語を無視して喋るムツオやエイコにさえも、その年齢に似つかわしくない丁寧さを表し、お菓子をあげた時にそれは際立ち、おおげさに頭を下げ、ありがとうございます、と早口に部屋へ走って行く。それほどに、他者の心を不快にさせない術を身につけているその子が、こと母親とのコミュニケーションの場においては、ただの“こども”に成り下がってしまうことが、ムツオには理解しがたく、おそらくは母親の気紛れにつきあわされただけで、子供には非はないと結論をつけ、おまえ、最悪の母親に当たったな、と言って男の子をなぐさめたりもした。

常に母親の機嫌に鋭い感覚を保持するその子が、毎日のように母親の神経を逆なでしている現状も、ムツオには不思議でならなかった。何度も同じ理由で、母親が怒っているのもムツオには不可解であったし、敏感な男の子がいつまでも母親の気持ちを感じとれないはずはないから、そのうち母親も叱る理由が尽きて、夜中に男の子の、ムツオの胸を締めつけるような、細く泣きじゃくる声も、いず

れ聞かれなくなるものだと放っておいたが、いまだにそれはおさまることがなかった。

その得体の知れない母と子の関係は、ムツオには全くの他人事にはならない理由は、充分彼自身も理解していた。

ムツオは、それを思い出すと、憎らしさが勝り、彼を冷たくあしらうこともあった。

外階段で男の子を見つけても、いつものような、同情からの優しさは影を潜め、無関心を装い階段を降りて行く。

男の子も、ムツオの不機嫌を察知すると、いつもの挨拶が出来なくて、じつと階段の中ほどに立ち止まり、何事もなくムツオが通り過ぎていくことを祈るふうな眼差しをおくるのが精一杯らしく、ムツオの姿がなくなると、安心して自らも鉄製の階段をカツ、カーン、と踏み鳴らしていった。その鉄製の階段が今同じように響くのをムツオは聴いた。玄関の鍵穴をこねくりまわす雑な音がした方を、意識的にムツオは振り返らなかった。

雨音がうるさくなってきた。

買い物袋を片手に提げたエイコが、ムツオの在宅は予期していたとばかりに、一言もなく夕飯の準備にかかった。

ムツオは、もしかしてエイコは自分の分を作っていないのでは、と臆測をめぐらせ台所へやってきた。

「今日、メシなに？」

エイコが透明の袋から惣菜を盛った一パックをテーブルに置き、巻き寿司のパックを二個つかみ、ひとつをムツオに渡した。

「これでいいでしょ？ 働いてないからおなかも空いてないだろうし」

「掻き揚げもふたパック買ってくればよかったのに……」

「じゃあ買ってきたら？」

「そついう言い方するなよ、傷つくだろ」

「なに甘えてんのよ、もうすぐ二十三になるくせに、きもちわるい」「二十三歳はまだこどもだろ」

「ダメよ、絶対にそんなこといわせない」

ムツオは言葉につまり両手に握られた巻き寿司のパックのラップを無意識におさえていたので、中身が指の分だけつぶれてしまった。「何種類か、太巻きを用意してあるんだな」

それで話題が変わるとはことさら考えてもいなかったが、やっぱりエイコの不機嫌は消せなかった。

「なに？ なにがいいたいのか分からない」

「いや……、ほら、ひとつのやつを切ったんじゃないんだ。サラダ巻きと、カツが巻いてあるのとキュウリの、最低三種類はあるんだ」

「……それがどうしたのよ、……はあ、もう、わかってる？ わたしはこれからどんどんおながが大きくなってきて、仕事だってそのうち休みをもらうことになるんだから。ここんところ体調だってあんまり良くないし。だから家事とかできなくなったら、ムツオにもやってもらわなきゃいけないくなるのよ」

それくらいのことにも頭がまわらないのは、これからのことを真剣に考えていない証拠だわ。その時は絶対に家事をやってももらうから。

そうエイコは吐き捨て、ラップをはがす手を止めず口だけはムツオを窺めつづける。

飲み物もなくムツオは急いで五つの巻き寿司を口に詰め、まだ消化しきれないのをほおばり自室へと逃げこんでいった。

「逃げんな」

エイコかと一瞬ドアの方を向いて、それは壁むこうのあの母親のものだと分かりムツオは壁際に聞き耳を立てた。

「トモユキ おまえのせいで」と母親のトモユキを責めたてる奇声が伝わり、いつもの喧嘩か、とムツオはぼんやり壁にもたれ、そこらじゅうの音を無防備に受け入れるやりかたでそれを聴く。

あんたを引きとらなかつたら別な生活もあったのに、わたし

はあんたのために仕事してるんだよ。でも、あんたはわたしにありがとうとも言わないじゃないか、掃除くらいやるのはあたりまえじゃないか、どうして考えつかないんだ、それくらいのことが。足を引っぱるだけならいらないんだよ。

だいたい母親はそんなことを、二時間ほどかけて延々と、ようやく怒りがしずまったかと、ムツオが壁から離れる直前、また違うところから怒りの源を掘り起こし、まだ足りないらしく、ついさっき言ったことを持ち出しさらにひとり興奮する様子だ。

母親の奇声を発するまでの流れは一通りで、右肩上がりに溢れる陰性の言葉に調子を昇らせ、やがて行き着く怒りの頂点に達すると一切を放出し、一時的な“おわり”を迎える。

他人ながらムツオは、トモユキに再び利益を度外視した憐みをよせずにはいられなくなる。

どうにかしてトモユキを、というよりは母親に対する憎しみの方が上回る、ムツオのひとりよがりな憤りは、この部屋を飛び出し親子と対面しないかぎり、今日中に放出の場を見いだせそうもなかった。



## 四

その日はエイコの帰りが遅くなることが前日に分かっていたので、ムツオは弁当を買い一人簡単に夕飯を済ませていた。

夕飯時にエイコの姿がないのは久しぶりだった。結婚を済むムツオに対しても、エイコはなんだかんだいいながらも、夕飯の支度を行い、時々、気の利かないムツオに八つ当たりをしたが、エイコのムツオに対する気持ちは依然として一途ではあった。

一人で部屋にしているとエイコの小言が聴かれないのが寂しく思えることもあった。

同棲が一ヶ月目を迎えようとしていた頃にやったケンカの後、エイコが初めて外泊をした。

次の日夕方遅くまで、丸一日帰ってこなかったエイコにムツオはしつこくどこに泊まったのかを追及したが、彼女は友達の家にとしか言わず、その内容もひどく曖昧で、エイコ自身歯切れの悪い返答しかできないことのもどかしさに我慢できず、感情的に理屈の通らないことでムツオを逆に責め出し、しまいには泣きだし強引に追及を逃れようとする。

あわてたムツオが、気まずいままにさらなる追及を怠ったのがいけなかった。

あの時、エイコはどういう心境で答えを濁したのか、真実をムツオは知らされず、しこりを残したままでいたため、ふたりの関係には急速に倦怠が訪れた。

そんな時期に妊娠のことを聞かされても、引き際を強引に呼び戻された驚きに茫然とたちつくすことしかできなくて、ムツオはああいう煮え切らない態度しかとれずにいた。

二人の付き合いは一年を越えていた。ムツオがその間に、三つ年上のエイコとの結婚を考えたことがなかったわけではないが、ムツオにとってそれは想像の枠内でのことで、普段のじゃれあいを使う

言葉程度でしかなく、本心でエイコとの結婚を望むようなことはありえなかった。まして自分の子供など作るつもりはもうとうなかった。

情など微塵もよせつけない非情さで中絶手術をうける、とわがまを前面に押しつけられたらどれほど晴れやかな気持ちになれるか。エイコとの同棲をこれ以上できないのは、ムツオ自身、彼女に幾度となく必要性を探した末に、もう快樂しかない結論づけ、不毛な性交をいろんな趣向で何度も強いても、以前と同じ快樂さえエイコからは見出せなくなっていたからだった。

がむしゃらにエイコとの関係に必要性を求めSEXをした結果、ゴム無し、というムツオが望んだこととは逆の結論がでてしまった。そして妊娠……。

結婚を躊躇い、自分の子供を持つことを嫌うムツオがゴムなしでの行為にすがりついたのは、ムツオ自身無策すぎた、と今更後悔しても遅く、彼女の存在とこれから産まれてくるであろう子供はムツオには重荷でしかなかった。自分には二人分の人生を背負える度量などありはしない、と悲観さえして。

エイコと胎内の子に消えてほしかった。同棲を終わりにしたかった。最近のムツオはそんなことに夢中で思考を馳せていた。

でも、世間体足を止めてみると、それがどんなに身勝手な行為かを知らないほどムツオは無教養ではなかった。

道德にやかましかった父親に叩き込まれた、世間への配慮という考え方は、容易く出産する同世代の若者とは違い、中途半端な学力から蓄えられた知識や道德観がムツオの出口の邪魔をする。自分にもあいつらのような短絡さがあれば、と厳格だった父親のことをまた憎む。

悪いことは父親のせいにしてしまえばいい。あれが父親であつたばかりに自分はこんなことで苦しんでいるのだ。

その為、未だ別れ話さえそのきつかけをつかめずにいる。次はエイコへと矛先が向かう。なぜ、おれの苦しみを理解してくれないのか、

と。

おれはお前達のせいで縛られたんだ。どうしてお前達の方から、おれの苦しみに救いの手を差し伸べてくれないんだ。

そう彼等を責めたててやりたいとは思っても、それが成しとげられないのは、ムツオの心底に深く刻まれている、父親の“しつけ”にあるということとを彼自身が自覚しているからにほかならなかった。

その“しつけ”が表面に浮かんでこないよう、意識的な努力を強いてはいたが、たいして役にはたたず、仕事中空想の中で、残虐な仕打ちで父親とエイコを懲らしめている自分に気がつけば、はっと驚き手を止めることも少なくなかった。ムツオはよく親方にそのことで注意を受ける回数が増え、叱られることに未だ慣れないムツオのプライドが、こんな底辺層の仕事など辞めてしまえ、と訴える。

扉をたたく音に意識が現実へと移り、テーブルの下で拳を固め、空想の中で息巻く自分をそこへ置き去りに、ムツオはあわてて玄関へ返事をやる。

「……すみません……となりの高橋ですけど、鍵を……忘れて、お母さんが……帰ってくるまで、待たせてもらえ……」

トモユキが、半そでと半ズボンの制服だけで寒そうに膝を擦りあわせ、扉を開けた時よりも深くおじぎをした。

まだムツオがなんとも言わないうちから、もう室に入れてもらえるものと判断したのか、片足を半開きの扉の内側にかけてトモユキが上がりこもうとするのを、ムツオは反射的に体を傾け防いでしまった。

トモユキのおどとした態度がそうさせた。そのまま無言でいると、ムツオが声をかけるまでその場におとなしくしているトモユキを憐れむことができたのを確認してから、ムツオが室内へと促した。脱いだ靴の向きを直し丁寧に揃えるトモユキに、ムツオは自分と同じ類の“しつけ”の匂いを嗅ぐ。

ムツオはトモユキに虐げられる人間の特性を認めていた。学校で

も虐められているに違いない、と勝手に決め付け、ムツオの胸中にもむず痒い高ぶりが湧きあがる。

怨みもない相手に対し、こいつを虐げてやりたいという理不尽さはそんな時に起こるものだ、とムツオもかつてクラスメイトをいじめ、また自分がいじめの対象にされた過去を思い出す。トモユキは嫌な思い出ばかりをムツオの脳裏に蘇らせた。

鼻をすすり、エイコのイスに座るトモユキの足先が床に届かずに震えていた。

今し方入れたばかりのポットのお湯で作ったコーヒーに、ミルクと砂糖をたつぷりと馴染ませるようにかきまぜトモユキに差し出す。

「熱いから気をつけて飲めよ」

砂糖は足りたらしく、トモユキは苦い表情を見せなかった。ムツオが、

「これも食べるよ」と食後のデザートにと買っておいたカップケーキをトモユキへ与えた。

申しわけなさそうに、すみません、と呟く臆病なトモユキに、ムツオの支配欲は助長し、テレビ台の内にあるゲーム機の電源を入れる。コントローラーを二つ、ソファのあるテーブルに置き手招きする。

「サッカーゲーム、できるか？」

冷えきった口内の粘膜を刺激され、ちびりちびりと用心深く口をつけコーヒーを飲んでいたトモユキの瞳孔が大きく開いた。

「それ、やったことがあります」

スプーン大盛り四杯も加えた砂糖の甘ったるいコーヒーを両手でしっかりと握り、トモユキもソファのあるテーブルへと移動する。

サッカーゲームは、ムツオの得意なもので、トモユキの操作が初心者並だと分かると、先取点を取り、力の差を見せ付けた後、多少てこずる演技をしてから、トモユキにも点を取らせてやると、最初よりかはトモユキの心もちとけた様子で、子供の無邪気な喜ぶ姿は、ムツオの邪心をほぐしてくれるようだった。

しかし、親しみをすぐに通り越しあつかましさを隠しきれなくなったトモユキが、カップケーキの欠片を床へこぼしても気づかずゲームに夢中になっていることで、ムツオがそれに気が障り、あの母親の怒りはおそらくそうだったところに原因があるのだらう。そう考えると、ムツオには母親の、トモユキを毛嫌いするのも少しは納得できた。

「ほんとおまえの母ちゃん悪い奴だな。おれだったら絶対殴るな、あんなにうるさくやられたら。おまえ、なんで反抗しないんだ？内心頭にきてんだろ？」

唐突すぎたのか、トモユキはなにも答えなかった。ムツオがストッパボタンを押して訊ねる間、トモユキはコーヒーをすすっている。もう冷めてきたのか、ちびちびとは飲んでいない。

そのしぐさの奥にある、隠そうとする意志をムツオがつまらないものだと言った。

「おまえの母ちゃんの大声がいつも聴こえてくるんだよ。全部知ってるよ」

トモユキが意外だという風にムツオを見つめる。そのままの姿勢でかたまり、何かを言い渋っているようにも見えた。

「好きにやればいいんだよ、あんな母親なんて邪魔だろ」と、力づくなら男の方が、そういうかけトモユキの、全身が細くできた肉の足りない体では、女といえどあの母親を屈服させることは無理かと思ひ直して言葉をそこで漂わせたまま、トモユキの反応を待った。

「……あたまにはくるけど……」

カップのふちから口を離さずに、息をつぐわずかに唇を動かし、ようやく一声を発した。

脳内で、励ましの言葉でもかけてやろうと、ムツオが半端な学力で気の利いた言葉を構築しようとしても、出来上がった文句はどれもいまひとつ極まりに欠ける。

壁掛け時計の針の行方はムツオの焦りを煽り、はやく、はやく、

言ってやれ、と急かす。

ムツオはゲームを再開しようと言っただけ言い、それから二人ともテレビの画面だけを見て指先を動かすだけだった。

コントローラーのボタンがカチャカチャと室内を賑わす。ゲーム音の歓声の中、ムツオが追加点を決めた。

首を左右に動かし自分を責めるトモユキに、あの母親でもないのと困る状況に陥ることを子供ながらによくわきまえているらしく、母親の悪口は言いたくても言えないのだろう、とムツオは考え、実際に子供一人では生きてはいかれないのだから、どんな親であろうとすがりつくしか道はないのだ。

ムツオは、どうすればスループラスがうまく出せるのかを実演して見せる。そしてさらにトモユキから点を奪う。トモユキも焦れてきたようで、むきになって教えられた通りにパスボタンを押す。フォワードに渡ったボールを奪い取るのは簡単だったが、ムツオはわざとシュートコースにディフェンダーを向かわせなかった。トモユキが二点目を取った。ゲーム内では、彼を褒め称える実況が流れ、トモユキはガッツポーズをしてみせた。ムツオが「今は良かったよ」と手をたたく。誇らしくガッツポーズをしているトモユキの顔にはもう恥ずかしさは見られない。

玄関が開いたのも気づかずムツオ達はゲームに没頭していて、エイコの“余所行き”の声に、トモユキが先に反応し、お邪魔します、とお辞儀する。

エイコの機嫌は良いようだ。ムツオに、「子供にコーヒーなんてだして。ミルクティーでもだしてあげたらよかったのに」

そういつて、トモユキに苦くなかったかと訊いている。エイコは笑顔を崩さない。

トモユキが甘くておいしかったです、と答えると、ムツオが経緯を話す。

「じゃあ、夕飯も食べていったら？　わたしもこれからだから。ムツオはもう食べたの？」

エイコの発する言葉には嬉しさが含まれているようで、付き合い始めの甘ったるい心地にムツオを誘う。ムツオはトモユキに母親の帰宅時間を確認し、まだ時間があると分かり、エイコと一緒に食べて食べていけと勧める。

トモユキもうわべだけの抵抗で、本心では期待していたらしく、すぐに折れ、わかりました。ご馳走になります、と深々と頭を下げる。

さつそく準備に取り掛かるエイコを背に、ムツオとトモユキはゲームを続ける。これが、家族なのだろうか

おれが父親だったなら、ともし自分がトモユキを育てる立場だったなら、うまくできるだろうか……。

共働きで、トモユキは自分達よりも早く家に帰ってきて、ゲームでもやって夕飯までの時間をつぶしている。そうして、エイコがまず帰宅して、夕飯の支度を始める。エイコとトモユキがなにかしらの会話を交わしている時に、ようやく自分が帰ってくる。

トモユキは自分を急かす。早くゲームをやるうと。夕飯が出来上がるまでトモユキと遊んでやる。父の威厳を保つため簡単には勝たせてやらない。たかがゲームであっても。

負けて悔しがり、それでも食い下がり、むきになって自分に挑んでくるトモユキをあしらうようにさらに負かしてやる。

その光景を微笑ましく名残惜しそうにエイコが「トモユキ、もうごはんできたから、明日またやりなさいよ。お父さんだってお腹空いてるんだから、ね」

食卓のテーブルを三人で囲み、ゲームの話で盛り上がる自分とトモユキのごはんをよそいながら、エイコも会話の間隙を狙って話題に入ってくる。また成績の話か、とトモユキがうんざりする。トモユキはちゃんと勉強してるから大丈夫だよな、と自分が頭を撫でてやる。

男同士の結束にやきもちをやくエイコの表情さえも夕飯の添え物のように鮮やかに感じられる。

その食卓には確かに自分が本当にほしかった“家庭”というものがあるに違いない。

そんな未来なら結婚も良いものかもしれない。

うまく父親になれるだろうか……。

自分の父親との仲さえ険悪なのに、自分の子供とまで確執が起くる“板ばさみ”にあうような人生だけは避けなければ、とムツオが自問自答を繰り返している間もコントローラーはカチャカチャと音をさせていた。トモユキが同点ゴールを決めてはしゃいでいる姿が、ムツオに実家への報告へ向かうことをようやく誓わせた。



## 五

海沿いの家というものは、そこに憧れる人々の羨望なども、その土地に住み慣れると案外面倒ごとの多いことに気づかされるはずだ。常に海況の変動を気にし、そこに住む人々にとって無作為な自然の働きがいちいち神経に障る。

道路一本挟んですぐに浜辺があるムツオの実家は、家の傷みが早かった。木造のベランダが潮風に腐敗し、結局また作り直すことになった際、建築業者が『錆びにくい鉄筋』にしようかと勧めるのも聞かず、父は家の外観を重視して頑なに木造に拘った。実に父らしいつまらない拘りだ。

そんなことを考えながらムツオは空港から市内へ向かうバスを実家付近で降り、そこからは海岸沿いを歩いて行くことに決めた。

ムツオが、久しぶりの光景を脇目に歩き、今朝のことを思い返す。玄関先で、学校へ向かうトモユキに声をかけられた。親しみの込められたその声で、この間のお礼を述べ、普段着のムツオが大きめのバックを肩に掛けているのを不思議そうに、どこかへ出かけるのかと訊いてきた。さすがに目敏いな、とムツオが感心し、

「これから、実家に帰るんだよ。お土産買ってきてやるからな。田舎だから期待はすんなよ」

この間トモユキの母親が菓子折りを持って訪ねてきた。そのお返しのことと考えてのことだった。

「いつてらっしゃい」

トモユキが鉄階段を鳴らし降りて行く。いつてらっしゃい。その言葉をエイコもその日ムツオにくれた。

トモユキとゲームをした日から一週間が経っていて、その間、エイコには自分と父の確執のことを説明し、まず自分一人で報告してくることを、なんとか了解させた。

ようやく重い腰を上げてくれたのかと、エイコはその日からムツ

才を不安にさせるほど、優しく接してくれるようになった。

七日間は同棲を始めた頃に戻ったような、新鮮さがあって、よく話もした。口数がお互いに増え、よく笑いもした。

こんなことで展開が良い方へと運ぶのなら、もっと早くそうしていればよかった、とムツオが、自分の精神の未熟さを反省し玄関口で靴を履く背中に、エイコの激励の声が飛んだ。

「ムツオ、いつてらっしゃい。がんばって」

鉄階段の上から、学校へ行くトモユキのランドセルが跳ねているのが見えた。

ムツオも浜辺の、半分砂に埋まった石造りの階段を同じように跳ねて降り、砂浜へと踏み出した。

ほどよく乾燥した砂浜は風もなく、そこから水平線を見渡せば、海洋タンカーや漁船が白波の尾を引きながら海上を横切って行く後ろに、普段なら霞がかかる隣県の島がはつきりと拝めるほど、今日の空は晴れ渡っていた。

ムツオは、エイコにまた以前のような感情を抱くことができたことを、本心から嬉しいと思えていた。

たまたま、同僚に誘われた飲み会でのよくある出会いから、よくもここまでの関係になれたものだ、と安っぽい恋愛にしか捉えていなかった以前とは違い、最近のムツオは、二人の間には強い結び付きの“巡り合わせ”があったのだ、とその発見に悦び、穏やかで、前向きな居心地の良さをエイコから感じ取れるようになっていた。

再びエイコのことを愛おしく思えるようになってたムツオ自身も、エイコに再び愛されている、と信じられるようにもなれていた。

結婚と出産にも迷いはない。上手く運んでくれるはずだ、と固く砂上を踏みつけ決意を新たにするムツオのもとに、懐かしい友人の顔がこちらに近づいてきた。

小学生以来の付き合いのあるその友人は、大学受験を失敗したムツオに最後まで、浪人生になっても進学しろ、と言ってくれた。

友人はムツオの第一志望の大学へ進み、帰郷しこの土地で働いて

いた。

こんな田舎じゃ楽しみは飲むことくらいだ、と友人は市内のほとんどの“飲み屋”を制覇したことを退屈の証しに、おまえも引き込んでやる。はまってる店があるんだ、今度そこへ行こう。

そういつてムツオに飲む約束を取り付けると、恥ずかしそうに足元の砂を蹴る。その友人の蹴り上げた砂の行方を目で追い、ムツオは学生時代と現在の、石階段の階数が違うことに思い当たった。

ムツオが浜辺の砂の嵩が前よりも増していることを友人に訊くと、今夏にこの市にしては大規模な催しがあるので、浜辺に散らばるごみの全てを人の手でやっていては開催日に間に合わないから、もとあった砂の上に大量の砂を覆い被せて、強引にごみを隠したために嵩が増えたのだと教えてくれた。

「えらいさんもくるからって、あわててこんなことやったって、なあ？」

田舎者はこれだから、せつかくの砂浜がだいなしだ。おれたちの世代がこの田舎を変えていかないと。年寄りの脳はもう修正がききんから。

そういきりたつ友人は、いつの日か、機会をみて市長にでも立候補してやろうか、とそれは冗談だから、とすぐに取り消す。

ムツオは、それは彼の本心であると理解していた。本来、生真面目な彼だから、真剣にこの土地の行く末を考えているのだろう。それに比べ、ムツオは自分の人間の小ささに恥ずかしさを覚えた。この土地の将来を真剣に考える彼の前では、自分の抱える問題が些細なことのように思えてしまうと。

「こんど陶器市をやるから、よかつたら来てくれよ」

ムツオの市は陶器の窯元が多くあり、陶器はこの土地の特産品の一つでもあった。友人は、せつかくの特産品も年寄りのアピール不足でいまひとつ認知度に欠けると憤慨し、

「おれたちが率先して行動を起こさんと何にも変わらん。じいさんどもは保守的でいかんし、おっさんらは安易に都会に迎合して、テ

レビ見て二番煎じの町興し企画立てよる。

去年、下嶋建設が上場したって喜んでたけど、あの連中は、株式上場がステータスだとまだ信じとる。東京には無理やけん、千葉とか、岐阜あたりに支店ばだそうとしとるって話も聞くけど、なんで地元を大事にせんかな、あいつらは。

西野鉄工も、いまさらISO取得したけど、金で買っただけで、毎週の会議もしらんし、作業場でヘルメットの首紐絞めとらん奴もある。規定なんて守っとりやせんわ。ユウキがあそこで働きよるけん、よう愚痴聞かされるわ」

同級生のユウキは父が自営業で鉄工所をやっていたため、小学生の頃から、おやじの後を継ぐ、を口癖のように言っていた。

高専で五年間学び、父親と二人三脚で最近まではうまくやっていたが、父親が仕事で事故に遭い、今も市内の病院から出られない状態なので、鉄工所をやむなく閉めたのだということを友人はムツオに語った。

「ユウキはしかたなく働きに行きよるけん、上司とようけんかしてくる。そん度飲みに付き合わされると」

ユウキは父親のことを慕っていた。冗談でも悪口を言えばむきになつて飛びかかっていくほどだった。学校帰り、父親を馬鹿にされ、四対一でけんかをしているユウキの、荒ぶり、ランドセルを振り回す勇姿をムツオは思い出していた。父を慕い、後継ぎを目指す人生を迷いもせずに自ら選んだ彼をムツオは羨ましくも思っていた。ユウキの父もムツオにやさしく接してくれ、この家の子になりたい、と言ってみたこともあった。ユウキの父は、

「じゃあ、ムツオも工業高校に進学してもらわんな」と冗談まじりに答える。

ユウキの父の子供に本気でなりたいて考えていたムツオは、やりわりとした拒否を子供ながらに感じ取り、ユウキの父に対し、その後それを口にするのはしなくなった。

「ユウキにも連絡してみるけん。三人で飲もうや」

ムツオの知らぬ間にこの土地も変化しつつあった。彼らに随分と差をつけられた、とムツオが並んで砂浜を歩く友人の横顔を見つめ歯軋りする。こいつは大人の顔つきになっている。学歴だとか、そんなものではない差がついたのだ、と嫉みをともなつて。

砂嵩の増した浜辺は時々足元深く沈んでいくような感触があつた。まだ新しい砂が所々に入り混じっているのだろう。

浜辺から歩道に上がり、再会に満足した友人は反対側の歩道へ渡つた。こちらに手を振る友人の去つていくのを確かめ、感傷的になつたムツオが、潮の微かな匂いを鼻孔に感じているその海岸沿いの、舗装のまずいデコボコの歩道を、大型の犬に牽引されるように手綱をとられ、たるんだ腹を大きく跳ねながら走る父親らしき男の後を、かわいらしい駆け足で女の子が追って行く姿が見えた。ムツオはその場に立ち止まり、懐かしい光景を思い出すような心地でそれを眺めていた。

ムツオが、実家に辿り着いたのは夕食前で、母の玄関先に出て待っていてくれたことには少なからず心の暖かく、故郷を懐かしむ類いの感情になれたが、居間に用意されていた夕食の場に父の無愛想をみつけると、ムツオは自然に子供の頃の窮屈さが蘇ってきた。

ろくに挨拶もせずに二階へ上がり、学生時代の唯一の落ち着ける場所だつた六畳間へ向かう階段のきれたところで立ち止まり、違和感を覚え室内を注視した。

そこにあるはずの学習机がないことは階段越しからでもはっきりと分かつた。学生時代は狭かつた空間が今は広く感じられ、その瞬間、ムツオは部屋から拒絶されている、とやはり一筋縄では行きそうもない父との確執の根の深さを再確認せざるをえなかつた。

自分の縄張りを懐かしむと同時に、他者の異臭を嗅ぎつけたような、相反する感情が一度に襲いかかり、この家にはもう安息を与えうる場所はどこにもなくなつてしまったことをムツオへ伝える室内の

模様替わりに、両親の、とりわけ父の、ムツオへの思惑が覗かれた焦燥感に付け足すよう、冷えた汗の小玉が背筋をなぞる。

まだ記憶も不確かな幼少期の夜にこの階段から転げ落ちたことをムツオは思い出した。何をしたかったのか、当時のムツオが階段ぎりぎりにつま先立ちでいるというおふざけをしていた際、足を滑らせ後ろ向きに階下へ落ちていった。突然のことに痛みも感じず、まず父と目が合った。

「夜中にうるさい、早く寝ろ」

確かに父はそう怒鳴った。ムツオは右腕を骨折していた。父の自分に投げつけた言葉を母に訴えれば、

「そんなことお父さんが言うわけがないでしょう。あなたはまだ小さかったから、記憶が曖昧になっているのよ」

母はどこまでも、家族のきずなを疑わず信じる人であった。それが当時のムツオには、母が、父に肩入れしているように思われ、一人怒り出すムツオの心中を察してはくれず、きまって母は、

「何が気にいらないの？ お母さんには分からないわ」

自らの口から言いたくない、気づいてほしいから、親ならば、とムツオが黙り込めば、母はますます自分の息子は生来から難しい性格なのだと決め付けるばかりだった。

この階段も憎らしい、とムツオが洞穴のような暗がりの階下から吹きあげてくる冷気の出処へ、憎悪を込めた一瞥をおくってやると、そこから母の快活な呼び声が返ってきた。

## 六

帰郷した翌日の朝は気持ちも沈みがちで、それまでに何度も繰り返してきた親子の確執が昨夜も失われずいたことを再確認しただけで、エイコに語れるような良い進展は全くなされなかった。

夕食の静けさに痺れを切らしムツオが、

「そういえば、ミイはどうした？」

母の箸が止まり、表情も曇る。

その、ミイと名づけられた猫を父が拾ってきたのは、ムツオが高校に上がる頃で、会社帰りに車の窓から確かに、目も未だ開ききらぬほど産まれて間もない子猫がいたのだ、と父は必要に母に繰り返し話し、夕食後思い立って、その場所まで戻り、語った通りの生後間もない子猫を父が連れ帰ってきた。

父にしては珍しい行動だったので、ムツオはその時の、

「今日からこいつを家で飼うぞ」といった父の笑顔だけは、良い印象をもった。それも子猫が成長し子を産むまでのことだったが。

ムツオが高校を卒業するまでの時間に、ミイは七匹の子を産んでいた。

しかし、ミイが成長の過程で、テーブルの食べ物に手を出したり、壁に悪戯したり、床に毛玉を吐いたりするようになってからは、それを嫌った父が、外飼いをするようになった。

七匹産まれた子猫達は成長しきらぬうちに全て家から居なくなってしまった。

まず、最初の一匹が車に轢かれ道路脇に転がっていたのを母が翌朝見つけ、部屋飼いに戻そうと父に催すも、反対され、同じようにして三匹が轢死し、いなくなった。

残った子猫の内一匹は父の知り合いに貰われていったが、最後の一匹は弱りきって、草むらの中に蹲っているのを、ムツオが連れて帰ってきた際に父が、猫は自らの死期を知ることができ、その時は

死に際を誰にも見せずに逝くのが猫にとつても“誇り”なのだから、余計なことをするなとムツオを叱り、元いた草むらへ戻すように命じた。ムツオはそれに従わなかったが、やがて力尽きた子猫は家の外で短い命を終わらせた。

そして、その儚い寿命を迎えた子猫たちを産んだ母猫さえ、父は最近、去勢をさせたらいいだろうと最後までごねた母の言葉にも、「去勢は、人間の傲慢さだ」と耳をかさず、ご丁寧にも車で、一時間も離れた山の中に放り捨てていたことを、母に前もって聞かされていたムツオが皮肉るつもりで、わざとその場で母に訊ねたのだった。

無言という言葉が噛合い固く離れず、誰も答えてはくれなかった。ムツオは父を挑発するために帰郷したのではなかった、と悔やむが手遅れなことは無言が証明してくれていた。

黙っておふくろの味を噛みしめるムツオは、ミイと自分を重ね合わせ憐れんでやる。

いかにもこの男らしいやり方だ。自ら拾った生命に責任を持たず、あまつさえ去勢をさせることを、非人道的だと、自身の行いに矛盾した理由から拒み、かといって、保健所に連れていき、猫殺しの罪を自ら負うことから逃げ、中途半端にその問題の核心ごと投げ捨ててしまう、そんな卑怯なやり方は確かに父にしかできない。つまりはこの男は卑怯者なのだ。

自分で産んだ子にすら責任を持つとしない。そんな奴を父などという必要がどこにあるだろうか。 。  
今度はムツオの箸が止まる。

自分も父と同じことをしようとしていた自分の行いに気がつく。父と子の“輪廻”とでもいうのだろうか、そこから逃れなければ、自分の子も同じように父となった自分を恨むに違いない。おれはそうならないためにここに来た。抜け出してみせる。父と同じ人生を辿ることだけには、最後まで抗ってみせてやる。



エイコと結婚し、両親とは違うかたちで家族を築いてみせる。おれは同じ轍は踏まない。

そう誓い、自分の中にある“父”を殺してしまうことが必要なのだと、ムツオは改めて感じさせられ、箸が折れるくらいに力をこめ強く握った矛先を両親の目の前で、白米のど真ん中に突き立ててやった。

昨夜の出来事を思い返し、ムツオは母にも優しくなれない点があることも見逃しはしなかった。

これほどまでに悩み苦しむ自分の、大きな問題の中心にある、父と子の確執を、母がまったくといっていいほど軽視するのは、ムツオには歯痒さの範疇を超え理解に苦しまれた。

父と自分がひとつどころに居ればどういったことが起こりうるか、つねに現場に居合わせていた母が予期できないはずはないのは疑いのないことで、あえて素知らぬふうを装うのも、ムツオにとってはなはだしいかぎりで、見破られるのを承知のうえで、できるだけムツオと父を近づけようとする、母の無策な愛情にも、うんざりしすぎているのだから、と母の思惑に沿うよう自身の態度を改めることはしてやれないほど、ムツオはその問題に疲れきっていた。

ムツオは実家に着いてからすぐに腹を下した。  
学生時代もその家の中でよく下痢をした。神経症の耳鳴りも頻繁になっていた。

それを二人に告げ、自分の神経が正常な親子関係を築ける状態にはないことを訴え、両親も素直にそのことを理解してくれるのなら、なにも他人行儀にそういったわるい兆候をひた隠すこともないのに感情の激昂だけで父との接近を拒む幼稚な行動を飽きもせず昨夜もやりそうになったわけだから、ムツオとしては一度でも父親が、例の、相手のいうことをはじめから疑い怪しむ、あのしかめ面と会話の途中に見せる鼻笑いを、どうにか話の終わるまでは控えてくれる思いやりが息子としての自分にあってほしいと願ってやまない。

しかし、今朝も相変わらずの不愉快さが食卓で起こったのは、めずらしく食パンを買ってきたことを喜ばしいことのように報告する母の、なにげなくムツオの近況を尋ねたことに発端があった。

テーブルで食事をするのはどれくらい久しぶりのことを訴えながら、忙しく手を休めない母が、ムツオのためにと買い置きしていた、未開封の紅茶の包みをわざわざ目の前で解き、以前の好みを今も当然続いているものとする母の、精一杯なやさしさは、父のそれとは異なる親子のきずなの縁切り難く在るのを目の当たりにした、ほどよい懐古の心地がムツオに素直な嬉しさを与えた。

「お父さんと二人つきりになってから、朝はいつもご飯にしたのよ。でも、パンもいいわね」

「そういえば、すぐに腹が減るからって、一時期和食に変えたことがあったよな」

「そう。でも、あんた朝からご飯は入んないからって結局やめたけど」

「胃がうけつけなかったから。むりに食おうとするともどしそうになったし」

「そうだったの？ 気づかなかった」

顔を近づけすまなさそうに、息子の成長をここぞとばかりに十代のそれと比較しようとする母親の目線がすぐに逸れてしまったのは、ムツオの頭上をかすめ背後に立っている父の無愛想のためで、その際母が不安そうにムツオへ、意味深な合図の一瞥を向けたのには、おもわず目をそむけてしまったほど、今までとは違った形に母の親しさが憎まれじれたく、父に声をかけ、向きなおってムツオの方から折れて、父になにかいいなさいと眼つきで促す母の装った会話を、ムツオは以前もそうしていたように、黙りこむやり方ではねつけた。

父親はテーブルの上座にあたる椅子に手をかけ、そこに父が座ることは承知のうえで、あらかじめムツオは離れた場所に席をとっていたが、そのことで父が不愉快になりはしないか、それですべての

ことをどうでもいいと投げ捨ててしまおうそれはあったものの、やはり父と距離をおくのが、ムツオとしても平常を保てるし、朝っぱらから畏まったりはしたくなかったからと、下座の向き合わずむ側の席をとっていた。

腰をおろし父はすぐに新聞を広げ、ムツオの視界を遮る位置から、

「まさかおれもパンじゃないだろうな」

「ちがうわよ、ちゃんとご飯も炊いてあるわよ」

「ならいいけど……」

父は食事に関心がなさそうに、顔の前に広げた新聞の文字に偏執的な注視をやり、母の気忙しくする一連の動作に無駄がないほど洗練されていることにも、微塵の興味も抱いてはいないのだろう、とムツオが、これは本当に自分の父親で間違いないのか不安になっていたこどもの頃を思い出した。

ムツオの幼児期に残る記憶の父は、母に関連したものにだけあって、それ自体では際立つことのない、母との思い出の挿話的なものにしかなかった。

父は家庭内のもめごとが收拾の見込みのみえないような時は、帰宅の遅れることが頻繁になり、ムツオがそれを意味のないもののように扱うことはまずなく、むしろそういったことにこそ父の本性をほのめかす、ムツオにとって意味のある些細なできごとなのだからと、父とどうにかして接近を試みるべく苦心する当時のムツオは、しつこくそのことで父を問いつめた。

はじめは適当にあしらうつもりでいた父親も、しまいにはいつものしかめ面をもってゆっくり、それでも確実に幼いムツオの深部を貫く無言の威圧に、こどもの彼は好奇心を体内に縫いつけられたように、感情を表立ってあらわすことをさせてもらえなくなった。

ムツオが、父に近寄らぬようになってからは、いざこざも自然に消失していき、むしろ父が家に寄りつかなくなすることを望むように考えが固まり、ムツオは母との二人きりの生活に、父の存在が不必要だとさえおもうようになっていた。

それも母が抵抗を示すまでの短い期間だけで、ある時から、よそよそしくムツオに接する態度を崩さなくなった母は、ムツオの行き過ぎた感情を危険なものと感づいたからだった。

高校を卒業する半年前には、あとわずかな友達との仲を存分に利用して、今度はムツオがなかなか家に帰ろうとはしなくなった。

そのことで父に咎められると、腹立たしさは最高潮に達し、受験と両親とのつながりに苦心し目眩のするあたまで生活していた当時の彼は、母にまで見放されたと感じるようになってからは、素行が目立って悪くなった。

親子のふれあいなどは求めていないと強がる自分を認めきれず、心の奥深いところでは強く求める自分との軋轢に堪えきれず、閉じ込めてはおけなくなったそれは、ムツオに猜疑心を植え付け、なんでも喧嘩のきっかけにした。

ただ話しかける誰にさえ八つ当たり、些細な言葉の裏を勝手に読み違い噛み付いた。

そのうち親しい友人のほとんどがムツオを避けるようになった。理不尽な怒り方をするムツオは、周りの受験生にとって邪魔者でしかなかった。だれも理解してはくれない苛立ちは成績までも悪くした。そして父親との殴り合いでの別れ。

受験勉強が嫌いだったわけではない、この家はそれが出来る環境にはなかったからだ、とムツオは受験の失敗を両親のせいにして、なんとか心の安定を図っていた。そして、そう思った。

今、両親の片方が死んだとして、自分がすこしでも感傷的になれるような気がするの、父が亡くなった時の、母の泣きくずれる姿に限ってだと。

まだ椅子に落ち着こうとせずに、父とムツオのために朝食の支度をすすんでおこなう母が、あわれまれて彼の目に映り、一人残された母がこの家にどうして生活の目的を見いだそうとするのかを、自分分はきつと他人事のようにしか悩んであげられないだろう。

その場合、母が実家を自分とエイコに明け渡す代わりに同居を申

し出たとしても、自分はエイコのような寛容な返答はできないだろう。エイコならば、母を受け入れる度量があるだろう。自分のような男でさえ包み込んでくれるのだから。

そう考え、今更ながらにエイコの母性に自分は引かれたのだと再認したムツオは胸の恥ずかしい疼きを感じ、それ以上母のかいがいしくするのを眺めてはいらなくなり、それでも父の手前、食べないまま逃げ出すわけにもいかず、恥ずかしさと、まだ十代の頃の、両親への抵抗と、逃避と葛藤が死なずにムツオのなかで潜み、活動をつづけていたことを、憎き敵の生き残りのように止めを刺すべく、空想にうかぶ意識の中を、手と口だけは現実に置き、追いかけてしまわしてみたところで、現れては消える身の不確かなそれを完全に殺すことなどできそうもなかったし、その殺害方法をもムツオ自身考えあぐねていた。どうすれば、自身の内にある“父”を殺すことができるのだろうか、と。

## 七・

友人は、仕事終わりの公務員そのままの格好で、ムツオを繁華街の人通りの寂しい路地に誘う。

派手なネオンで飾られたビルの二階に初めて訪れたムツオは、背中越しに友人の、常連の二オイを嗅ぐような心地がした。

狭い通路に同じ間隔で鉄扉があり、その幾つかは半開きにされているにもかかわらず、室内からは人の気配がほとんど感じられない。代わりに濃い紫やピンクの視界のぬかるむようなぼんやりとした照明が、その場での出来事を秘することを、訪れる人々へ黙示しているようだった。

そこいらの扉から漏れている艶やかな照明の色を、誰彼に踏み散かされた汚い床に映す通路を、無関心に奥へ歩む友人の後を頼りない足どりでムツオは追う。

行き止まりまで来たところで友人が左手にあるドアノブをつかみ、ここだ、とムツオを振り返らず、おさえた声で室内へと促した。

「どうぞこちらへ」

ぼうつと室内を眺めていたムツオの肩をこづき、友人は黒服のボーイに連れられ店内の中心部に取りつけられている、ひと際大きく見栄えのするシャンデリアの真下にある、オレンジの灯りに輪郭を量しあらわにさせている、『コ』の字型をした革張りのソファにもう腰かける寸前で、せせら笑いムツオに手招きをしている。

扉のすぐ横に会計のカウンターがあり、案内係が二人いる。一人は友人を席へ案内しこちらへ戻ってくる途中だった。カウンターの奥は従業員の控え室らしく、黒いカーテンの隙間から、煙草を吸っている男の姿がみえた。じれったそうにもうひとりのボーイが中央の席を指しムツオに声をかけてきた。あわてて友人の方へ小走りにかけた。

「はじめてだったか、こういう店？」

「いや、それよりユウキのところはいつもこうなのか？」

ムツオは、ユウキが遅れて来ることを友人からさつき知らされた。ユウキの工場は三交代制だから、そういう時もあるのだと友人は特別なことではないと言い伏せた。

ボーイがグラスを置く際に指を滑らせ、テーブルとグラスがぶつかり、ムツオの神経を乱す音をたてた。それから眼をそむけるようにムツオは左右に視線を移した。似たようなソファとテーブルが窓ぎわに三組、控え室側に、二組の扉に近い席に友人とムツオが座っていた。

室内は狭く、客同士が顔をあわさずにすむよう互いに背を向ける設置ではあったが、入り口からのぞいた時は正面の窓ぎわの一席だけに三人の客がいた。あまり繁盛している様子ではなかった。

ムツオが居る脇の席は、客の帰ったあとのグラスやフルーツの皮だけ載った器を片づけるボーイの退屈そうな姿があり、それを友人に訊ねると、店の営業時間が十二時までだから、もうこの時間は客もまばらなのだと教えられた。

ムツオは携帯の時計で現在の時間が十一時を過ぎていることを告げる。ユウキの姿はまだ見えない。

「大丈夫、四十分単位なんだよ、ここは」

友人が、五千円あれば充分だといったのはそのことが、そうムツオは尻に手をあて財布をジーンズ越しに確かめる。

「延長はできないけどな」

「別にするつもりもないよ。でも、おまえのお気に入りっていう子を早くみたい」

「だから客の少ない日と時間帯を選んできたんだよ」

高校時代からの付き合いのその友人は、ムツオが専門学校に通っていた頃、ムツオの第一志望であった大学での生活を、月に一度くらの間隔で会っては楽しそうに聞かせてくれた。

実家を離れた土地で唯一ムツオのことを知るその友人が、彼にとって救いとなり、ムツオの第一志望での大学生活を楽しむ彼を僻むこ

ともなく、特別に通いたいわけでもなかった専門学校での二年間をムツオがなんとか過ごすことが出来たのは友人の助力なくしては果たせなかっただろう。

あの頃の自分はよく朝夕の新聞配達と専門学校の往復という荒業をこなせていたものだ。

それには父への反発という原動力もあったが、それだけでは成し得なかったに違いない。

ムツオの受け持った区間は朝刊が、スポーツ紙、英字新聞を含め三百部にもなり、夕刊でも百五十部を切ることはなかった。

専門学校から戻るとすぐに夕刊を配り、その後用意された夕食を済ますとすぐにチラシの折り込み作業にかかる。それから次の朝三時半には起きなければならなかったから、夜の九時には寝てしまうので、テレビにもほとんど関心がなくなった。

修行僧のような生活の潤いが、その友人とたまに会って飲むことだった。二人とも上京しすぐに酒を覚え、未成年の頃から記憶のなくなる感覚に憑かれたように酔っ払うことを楽しみとしていた。器用な友人と違い、気難しいムツオは、友人だけが“友”であった。

ムツオは感謝という言葉を彼に対しては口にするのができそうだったが、未だ言えずにいた。今更ながらに自分を“ガキ”だと恥ずかしく思われてならない。恥ずかしがることなどない。はつきりありがとうと言えがいいのだ、と心の中では強気になれるのだが。

ボーイに、友人が今夢中だというその子を指名してから数分が経つ。控え室と店内を隔てる壁に、ムツオたちは向かい合い座る格好になっている。その薄壁からすました笑い声とともに、カウンターの奥から女が二人、こちらへ近づいてきた。

ユリという名前の女が、二人の前に立ち、後からもうひとり女が来てムツオの隣に座り名刺を差し出した。その女は名乗らないで、ムツオの横顔をのぞきこむように頭を下げた。

「わかんない？ 睦夫君」



ムツオは名刺にある名前をもう一度みて、友人の方を振り向き、顔をしかめる。

「本名じゃないし、ちょっと無理かもな、こいつには」

クラスが違つたし、と友人はそえ、その女の本名を気のない調子で早口に言つた。それでもムツオは理解できずにいたが、高校時代の友人の彼女だということをてれくさそうな彼から聞かされ、ようやく学生時代のひとつの記憶に彼女の存在をみつけた。

ミチと差し出された名刺にはある、その本名はユミコに対するムツオの印象は、友人をわがままにふりまわし、勢いのある、その頃のムツオには近寄りがたい、強気な女というふうだった。

ミチはいま、友人にだけ、くだけた話し方をしたが、ムツオにはいくらか遠慮がみられ、二人の間にミチが座り、三人の会話が始まると、ユリという高校を中退したばかりのなれなれしい女は、とりとめのない話題で会話に入ろうと試みるが、そのつど三者共有の昔話に弾きだされ、そのうち諦めたらしく、せつせと水割りの氷にウイスキーを注ぎ空いたグラスをうめることに専念し、その合間に三人を恨めしそうに眺めていた。ユリがひとりごつのように、ミチの子供のことを訊ねると、その場から瞬間、笑いが消えた。

「うん、元気よ。お母さんになついちやってるから安心よ」

そういえば、睦夫君知らなかったわね、わたし二歳になる男の子がいるの。

ムツオがなにも言わないうちに、悪いことでも吐き出すように一息で、三ヶ月前に離婚

してから実家へ戻り、子供のためにこの店で働きはじめた近況をのべ、少し間をおき、

「結婚はしないの？」

そう訊かれ、ムツオはおもわず大声で抗議しそうになった。

「いや、まだ……」

ミチは、ひと月のうちに常連となっていた友人から、あらかたのムツオについての最近の事情を会話のつなぎに聞かされていたよう

で、エイコの妊娠にさえ自身の経験からムツオへの批評まで加えてみせた。ムツオはあの浜辺で、懐かしさからしゃべりすぎていたことを今後悔した。

ミチのそれはエイコを擁護するもので、ムツオの立場など男の勝手な言い分でしかなく、論ずるに足りないという。

多少は離婚相手との混同がみられる点がいくつかありはしたが、全体的にムツオはそれを頷いて聞くことができた。それでも理屈にそぐわない否定的な感情を捨て去ることはできずに、エイコとの結婚を心配するミチの母性がみせる暖かみのある表情は、ムツオにとってはたんに現在の不安や恐れを煽るだけの効果しか生じさせなかった。

その後遅れて、汚れた作業着のままでユウキがやってきた。

久しぶりの再会をユウキは心から喜び、友人から聞いていたらしくエイコの妊娠も知っていた。

「結婚は大変やぞ。うちも一人ガキがおるけど、嫁と二人がかりでもかなわん。ガキの相手は疲れる」

その表情からは辛さなど感じられない。男気溢れるユウキは性別を選ばず好感があった。

頼りがいのあるユウキを妬ましく感じることもあったムツオにしては、当時のユウキは自分とは対照的な位置に思われた。

毎日が不愉快でたまらないムツオは、他人へも不愉快さをばら撒いていた。自分のことを病原菌だとも弁えていたうえで、周りにも自らの不機嫌を伝染させていった。

そんなムツオに対してもユウキは彼に接する態度を崩さなかった。ムツオもユウキと友人だけには心を開き、親子関係の都合よくいかないことを打ち明け、慰められていた。

あれがなければ卒業まで自分は持ち応えられなかったかもしれない。ムツオはこの場で礼をいってもいいだろうか、二人は不思議がるだろうか、もう酔いでふわりとする頭でそんなことを考えていた。

かけつけでビール中ジョッキ三杯飲み干し、次は焼酎に手を出そ

うとするユウキを友人がたしなめた。

「よかたい。久々の再会だもん、なあ秋山」

ムツオは頷く。友人はわざと声高に、

「お前下戸のくせして、無理すんな。運ぶとはおれぞ」

「しまったことか、嫁に向かえばたのむけん、よか」

ミチがユウキの嫁の擁護をする。それにもユウキは堪えない。

三人の会話の流れから、ユウキの嫁は控えめで、男に身を置く女性であるらしい。今時珍しい、とムツオが口にする。

「そうぞ。うちの嫁さんは最高たい。よかぞ結婚は」

「お前、さつきと言いよることの違うぞ」

よかよか、とユウキは客の少ない店内にしゃがれた笑い声を響かせる。

それからこどものことも話し出し、自分は野球をやらせたいからと、もう幼児用のグローブとボールを買ったことも話した。

「去年産まれたばかりで、気の早すぎるわ、こいつは」

友人の言葉が、ユウキが来てから汚くなったことにムツオは気がついた。同じ速さで別のことにも気がついた。

この土地の言葉を“汚い”と表現した自分を、ムツオは恥じた。なぜ“汚い”と感じたのだろうか、と今はそんなことを考えたくはないムツオは、気を逸らそうと、この土地の話題を二人から聞き出そうとする。

ユウキは剣道のことを話し出した。ムツオの故郷は剣道、柔道が盛んで、中学まではムツオも剣道部に所属していた。

「なんが宮本武蔵か。あれはよそもんだろが、あれじゃなくてちゃんとおるだろが、地元の英雄が」

ムツオは丸目のことだと分かった。それくらい、この土地で剣道をやっていたら一度は聞く名前だった。

「丸目蔵人介長恵がおるのに、なんでよそもんにたよるかなあ、連中は」

「丸目は自分のこどもば殺しとるけん、ウケの悪かとじゃなかか」

「たんにマイナーなだけやろ」

こどもに関連させ無理に方言で答えたムツオに、友人が素早く返した。ユウキがそれに噛み付いた。

「丸目がマイナーって？ お前はなんも知らんな。ムツオ教えてやれ、こんしつたかぶりに」

友人がムツオより先に口を開けた。

「お前のおかげで、おれも剣豪マニアになったと」

ユウキが鼻で笑った。それには不愉快さは見られない。おそらくいつもこんな調子なのだろう、とムツオは自分がいつの間にかよそ者になっていたことを痛感させられた。

店を出るとすぐにユウキの嫁がやって来て、酔っ払いに肩をかすのを友人が手伝い助手席に乗せると、ゆっくりと運転し帰路を行く、その優しそうな女性が、ユウキのような男をいかにも好みそうだとムツオが納得し、その後友人と二人で酔い覚ましついでに途中まで歩いていくことになった。

その間、友人がもったいぶってミチと付き合っていた頃の、ムツオにはどうでもいいような出来事を、不意に思い出したようにしゃべり、言い終わると黙り、また突然愉快そうにひとり面白がる。

視線は歩く方に注がれ話題も一本調子で、ムツオのことなどおかまいなしといった感じで続けている。

最初は適当に聞き流していたムツオも、あまりにも友人のしつこくこだわる様子に考えが移行し、ふと、あけすけな態度にまわりくどい性格を隠し持つ友人の性格に思い当たり、それでもいいじわるく、アルコールで濁った黒目にほとんど瞼をかけ、友人の耳元で囁くように言った。

「彼女と付き合うつもりなのか」

店を出てはじめて二人の視線がはつきりと合った。

「でも今度は子持ちだぞ、おれは別になにもいうつもりはないけど」  
立ち止まっている友人を追い越し、ムツオはエイコのことを考え

ないようにしようとすればするほど、よりはつきりと妊娠や結婚が差し迫ったものに実感されてくることを煩わしく、でもたぶんそうするしかないことも同じくらい身を感じていた。

先ほどとはうってかわった友人への憤りの原因はそれにあった。

他人の子をいとも簡単に背負うと言える友人の誠実さがムツオには当て付けに感じられてしまっていた。

おれだって出来る、とはつきりとは言えない悔しさもあつた。自分にはうわべだけなら演じきれるだろう。でもすぐに見抜かれてしまふだろう。以前の自分のように、父の自分に対する気持ちを敏感に感じ取れていた“感受性の塊”のようなこどもの眼差しで、自分の子も、父の“心あらず”に気づいてしまふはずだ。

本気になって愛してあげなければいけない。そもそも自分ののは、本当の子なのだから、友人とは違った容易さがあるはずなのに、友人よりも臆病になっている自分が、ムツオには悔しくて仕方なかった。

どうすればこどもと共に生きていけるのだろうか……。恨まれることなく、成人したその子と飲み交わす日は、自分には訪れるのだろうか。

良い父親のイメージがムツオにはなかった。

その欠落した部分を埋めるために、何を持ってすればあてがえるのかが分からなかった。

どこまでも自己憐憫から離れられないムツオが、いつそ自らの命を絶つてしまえば、この因縁を終わらせることができる、と父から受け継いだDNAなどこの世に残してはならないような気がしてくる。

後ろを振り返ると、俯き悩む様子の友人もまた、自分と変わらな

い若者なのだと、幾らか気分も落ち着いてくる。  
友人の悩み考え込む姿は、今のムツオには、ほとほとありがたかった。

## 八

出産に関する知識を少しでも増やそうと、エイコは本屋で目にしたものを摘み読みし、どれかひとつに決め、レジに持って行きたいのだが、どれが良いものなのかいまひとつ決め手に欠ける。

一時間も経とうとするその本屋に腰の痛みと、脛に痺れを感じつつ、とりあえずムツオにメールでも送って相談しようかと手を止める。

煮え切らない彼の返答が容易に想像がつく。本当にムツオとでいいのだろうか、と一人で部屋にいるとそういった不安に苛まれるので、自然とエイコの帰宅は遅くなっていた。

あの部屋に一人でいたら、出産は本当に正しいことなのだろうか、と思われてくる。ムツオにすっかりとした生活観を示してほしかった。頼りなさは優しさで一応の繋がりがあるのだから、女に対し手をあげないし、やかましくするわけでもない、外見に隠された優しさには早く自分だけが気づいたからこそ、自分がムツオを彼氏という対場に置くことができていた。

それは確かなものではあったが、初めての妊娠は、エイコをつねに不安な方へばかり駆り立てた。

感情が乱れ安定しない自分に戸惑い、無性に泣き出したくなる夜もあった。そんなそぶりは一度だってムツオの前では見せなかったのは、年上というだけではなく、なにか男に弱みを見せるのが躊躇われる性分からくるものだった。

エイコの両親は定食屋をしていて、時々エイコも仕事に借り出されることもあり、大人の汚らしい会話や、作法の、まるでこどもじみた態度を、何度も目の当たりにすれば、こどもの頃から大人というものをなんとなく、そういうものなのだろうと達観していた、同年代の子とは雰囲気異なる、こどもであるのに世間擦れのする、大人びて見える子に育っていった。

結婚したら、こどもを産むのも当たり前のことなのだろうと、そんな風に他人事にしか考えていなかったが、いざ自分がその立場におかれると、それまでとは違う、現実の問題がエイコの精神を臆病にさせていった。

考えが感情と絡まりあつて、心の身動きのとれなくなり、たまらず手にした本を戻し本屋を出る。

今日は実家に泊まるう。そう決めて、エイコは駅へと引き返しなから、実家への電話を入れる。

呼び出し音が五回、六回と鳴つてもうんともすんともいわれない。それでも店の事情をわきまえているエイコは辛抱強く鳴らし続ける。はい、もしもし、と母が、こんな時間にかけてくれる客を嫌っているのが声で理解できた。

「あら、あんたなの。え、いいわよ。じゃあ忙しいからまた後でね、はい」

慌しく言い終わるとすぐに通信を切つてしまう。改札をくぐるより早く切れた電話も、この時間帯ならしかたがないことだった。夜の一番繁盛する時に娘からのつまらない電話など商売の邪魔をするだけだといつもなら割り切れるのに、ホームに順番待ちで並ぶ今はどうしても割り切れない気持ちがある。内心あった。

母に雑に扱われたことも普段ならどうということもないのに、今日に限って見捨てられ感がまといつき、しゃくに障る。

それでもあの部屋に一人でいるよりかは気も休まるだろう。駅前の本屋に寄つたのも、今更ながら、はじめから自分は実家に戻るつもりでいたことを予見してのことだと思われてくる。

ムツオとやった大喧嘩のことが脳裏をよぎり、あの時も実家で一晩過ごしたことを、わざと俗っぽく意味有りげに黙り込んでみせたのも、今にしてみれば、あれでムツオの気を惹こうとした自分が馬鹿みたいで、ムツオがそのことで自分のことを今も疑っているのなら、きちんと弁明するべきだったと省みたが、今更そんなことをしては却ってなにかあつたような誤解をあたえるだけだと元の所思に

立ち返ってくる。電車がエイコの髪を大きく乱れさせ、髪を片手で整え直し車内の座席に腰をおろす。

両親を眺めていたら簡単そうに思っていた結婚と出産が、これほどまでに重く押し掛かる問題なのに、このうえさらに子育てといわずれ職場復帰も考えなければならぬ将来に、エイコの心身は疲れ果て、降りるはずの駅を過ぎても眠りから覚めず、束の間の休息を続けていた。

実家の定食屋の明かりが落ちていないけど、エイコは、裏口まで回り勝手口から入るのは面倒で、店の暖簾を慣れた手つきで払いのけ、扉を控えめな音をさせ開く。

「おう、エイコちゃんじゃないか」

なじみの客の一人が、セミロングを明るめの茶色で染めた、時間帯に不釣り合いな大人の女が、成長したエイコであることを目敏く言い当てる、店内に懐かしさのざわめきが起こった。

エイコはわずらわしい接客を出来ない性分だったから、知り合いのおじさんにするような、なおざりな返答で、今日は疲れてるの晩酌してあげたいんだけど、お母さんにやってもらつてよ。

「あいかわらずぶつきらばうだな、エイコちゃんは」

なじみの客は小学生の頃からそうした接し方で配膳を手伝うエイコを知っていたから、酔いも相まって、笑い上戸が勢いを増す。

今夜はエイコちゃんに会えた記念だ、もつと金を使ってやるからつまみも酒も追加だ、おやじ、と気前のよい態度をみせ、店内は閉店間際の、季節はずれに花火の、最後の一発を打ち上げたような活気にあふれた。かたわらにいた客の数人から、そのやりとりを感嘆する声があがった。



## 九

古くなつて、くすんできた家中の物に、いちいち文句つけ、あれはもう使えなくなりそうだ、これはもう買い替えたほうが安くつくとか、両親の懷事情もおかまいなしにいちやもんをつけるチンピラみたいにエイコは、エイコのやり方で両親に甘えてみせる。

「そんなこというんだったら、お前が買つてこいよ。せつかく育ててやったのに、家に金も入れないで男としけこみやがって」

「そんなことしなくつたつて、今日の流行り具合をみたら、大丈夫だつてことくらい分かるわよ」

「こいつぬけぬけと、ほら、晩酌しろ」

父のコップにビールを注いでやりながら、「缶で飲めばいいのに、コップ洗う手間が省けていいでしょう」

「こいつは情緒の分らない女だな。わざわざコップに注いで、ビールの色見ながら飲むのがいいんじゃないか。缶の成分表示やらアルコール度数が飲み応えをうまくしてくれるかよ」

「男つてめんどくさい」

おまえは結婚できない女だな。父は娘の注いだ、泡の多いビールを、それでも文句も言わず飲んでいた。

母がエイコにもつまみを用意しようかと訊いてきた。

「わたしはいい。寝にきただけだから」

「なんだ、男とこじれたのかよ」

「すぐ勘ぐる。やっぱり男つていやだわ」

今日はやけに絡むな、と父は多少控えめになり、まあ、なんでもいいや、別れたつて次があるだろう。おまえもまだみてくれで男を捕まえられそうだからな。

エイコは、「お父さんがそうだから、わたしの男の趣味はおかしなつたのね」

吐き捨てるように立ち上がり、お風呂お先いい、と母にことわり

洗面台に向かう。

母が後からやってきて、

「あんた妊娠したんじゃないの？ わたしは別になんにも構わないけど、お腹が大きくなる前に式をあげたいんだったら、立て替えとくわよ。おとうさんには内緒でね」

「くれるんじゃないの？」

「いやよ。老後の蓄えなんだから。ちゃんと返してもらわよ」

「誰も金借りに来たわけじゃないから。それに式なんてあげなくったっていい」

「ふうん、それじゃあ妊娠は本当なのね。まあ近いうちにおとうさんにも教えてあげなさいよ。あの人こういうことってすねるから」

エイコはやっぱり母と一番気が合うから、母と会話するのが気晴らしになる。帰ってきて正解だった。

「今度彼、連れて来るから」

エイコはさつと洗面所の扉を閉めた。

次の日、昼過ぎまで実家で過ごし、母にお土産の食料を頂いて、今日ムツオが帰ってくる日だから、ちょうどいい、今夜は豪華な夕食にしてやろうと考えて、アパートの階段を昇った。

その音を聞いて、隣の部屋の扉が激しく開いた。トモユキが、手にメモ用紙のようなものを握り締め、お願いがあるんですがいいでしょうかと、いつものように、必要以上の謙虚さで話しかけてきたトモユキの表情は差し迫ったなにかを背負っているような必死さが見て取れた。

なにがあつたのかは、普段の親子関係から大体想像はつくが、一応訊ねる。多分母親が帰ってくるまで待たせてもらえ、だろつとエイコは思っていた。

トモユキは不登校になっていた最近の自分の事情と今まで母から貰い続けた、虐げられる苦しみを語り、母とはもう一緒にいるのに

堪えられなくなったことを涙目で訴える。

当ての外れたエイコは、気持ちを切り替えて、自分はどうすればよいのかと改めて問う。

トモユキはすでに児童相談センターに電話を入れていて、センターの職員から、誰か信頼の置ける人に頼み、こちらを訪ねることはできないのかといわれ、始めはムツオに頼むつもりだったが、まだ実家にいるから無理だと知っていたから、お姉ちゃんの戻ってくるのを待っていた、とエイコに告げ、一緒に行ってくれませんか、おどした態度だが、真剣な眼差しでもう一度お願いしてきた。

エイコは昨日実家に帰ったことと、のんびり帰宅したことが、急に申し訳ないことをしたような気になり、すぐに児童相談センターに連れて行くことを安請け合いたが、その所在を知らないことに思い当たる。

トモユキは住所を書きとめたメモ用紙をエイコに手渡し、母が帰ってくるまでにここを離れたいのだ、と強調して懇願する。

トモユキの周到さに感心しつつ、大丈夫だからね、そういつて手早く身支度を済ませ、念のためにトモユキにも着替えを用意させた。最悪一時保護される可能性のあることも考えたうえのことだった。以前医療事務をやっていた時そういった親子が来院した際、同僚に聞かされた一時保護のことを思い出し、タオルや歯ブラシなどもバツクに詰めさせる。母親が帰ってくるまでに家を出よう。

エイコはトモユキの手を引き、センターへ向かうために駅に戻るうとしたが、途中のバス停の時刻表を見てあと数分でセンター行きのバスが来るので、こちらにしようと二人はバス停に立ち待つことにした。

立ち止まり待つという行為は、エイコの心内に少しの隙を生み、トモユキの手を引き出かけたのはいいが、と急に不安が起こる。

トモユキの母はどう思うだろうか。わたしのことを逆恨みしやしないか、それでアパートに居づらくなりやしないだろうか、暴力がわたしにまでむけられることになっては、おなかのこどもの健康状

態に差し障る。トモユキには申し訳ないが、わたしひとりの手には負えない問題のような気がしてきて、エイコの良心はしだいに萎んでしまい、いつバスが見えてもおかしくない忙しい状況で、トモユキと手を繋いだまま、

「ちよつと電話してみるね。向こうの人にもわたしのこと言っておかないと」

トモユキの手を離し、手渡されたメモを見ながら携帯の番号を押していく。

すぐにつながり、センターの女性職員の甲高い、受け付け慣れた口調を聞いて、エイコは幾らかほつとする思いになれた。電話越しに人の良さそうな暖かさが感じられた。

トモユキのことを話すと、すぐにああ、あの子ですか、とトモユキからの電話を受けたのは自分だったことを告げ、おおよその事情は分かっていたので、エイコからはほとんど話すことがなかった。

電話の向こうの女性がエイコの名を訊ねてきた。エイコはその言葉を遮るように、自分のことがトモユキの親にばれたりはいしないのか質問を返した。

女性職員は、はっきりと守秘義務は守られるものだから大丈夫です、と答えた。それからエイコを通報者として扱うことと、それによつて聴取をとること、書類に記入してもらう必要があることも説明してくれた。

「この子はどうなるんですか？」

それはまだなんともいえないです。

その言葉に自分とトモユキの救いを突き放され心細くなってくる。職員の話の続きを聞く限りでは、母親と一時的に離れたほうがよさそうではある、と今の段階ではこちらにまずその子を連れてきて話を詳しく訊かないことには動きようがありません。またエイコの気がかりを拭ってはくれない答えが返ってきた。

確かに一度も本人に会わない今の段階で答えを職員に求めるのは無理があると思ったけれど、エイコとしてはこの落ち着かない不安

を治める言葉がほしかった。

今そちらへむかっている途中ですので、とエイコは伝え、職員も大丈夫あなたのことも任せてください。匿名性は守られますから、と切り際に穏やかな声色を聞いて、励まされたようにエイコの気は軽く、普段の強気になれるようだった。

バスの中で二人は立ち、吊り革をつかめないトモキの支えにエイコはなつてやり、トモキは必死にエイコの腰のベルトを握ってきた。

それを見ていたすぐ隣の座席に座っていたおばあさんが、「ぼく、ここに半分かけなさい」

おばあさんは一人用の座席の、肘掛に座るように誘ったが、控えめなトモキは、エイコのベルトから肘掛へと支えを移し、「これで大丈夫です。ありがとうございます」と上手にお返しの言葉を述べた。

おばあさんはトモキの礼儀正しいことと、その子連れにいるエイコまでも褒めてくれた。

わたしは親ではないんですよ。エイコが答えると、「あら、二人があるから、上の子かと思っただわ」

言い当てられたことと、自分が母になっただけでもおかしくない歳に見られたことに、年寄りの経験からなる洞察力の優れていることに、「何で分かったんです？ まだお腹も目立ってきてないのに」「そんなのは顔で分かるわよ。でも、初めての人には見えなかったわね。一人くらい産んでいそうな度胸がありそうな人だと思っただから。気を悪くしたらごめんなさいね」

エイコは片手を振って、そんなことはありません。驚いて、嬉しかったくらいですから。おばあちゃんの初産はどんな風だったんですか。よかったですら聞きたいんですけど。

いかにも年寄りの話したがらしい、そのおばあさんは、自分の遠い昔の腹の子を宿したことを、自分のは安産だったから、一時間もかからなかった。二人目の子は逆子だったから帝王切開をやった

のだと、傷口の残った痕あたりをさすり、今はこんなには傷の残ることもないし、逆子も直せるらしいから、あなた達の年代の出産は生き死にの問題にはならないでしょうと、慰め出来る限り穏やかでいることを心がけなさい。

腰をちよつと浮かし、降車ボタンを押し、ここいいわよ、どうぞ。そういい残し、バスの止まらぬうちから降り口へ座席を伝い向かっていった。

おばあさんの温もりの残った座席に、エイコはトモユキを座らせ、自分はトモユキを周りから隠すように彼の横側に、誰もこの子を傷つけさせないとばかりに仁王立ちするよう、力強く立ってみせた。

センターは思ったよりは人の少なく、受け付けであの職員の名を出し、すぐに別室へと通された。

巻髪の、所々飛び出た毛を直しもしないほど、その職務に真剣なのだろうと思われるほど身なりに気を使わない、地味な紺色で全体を彩った四十過ぎほどのやせ気味の女性が二人の前に立ち、自分の名を呼び、よくきてくれましたね、とトモユキの頭を撫で、「もう安心だから、ちゃんと、おうちでのことを話して頂戴ね」

それから、あなたもありがとう。よく勇気を出してこの子連れて来てくださったわね。

エイコは、それで自分は何をすればいいのか訊き、女性職員は、児童虐待通告書と書かれた書面を見せ、「もし、仮に虐待がなかったと判断された場合でもあなたがその責任を問われることはありませんから、その旨承知された上で、こちらにご記入なされてください」

書面の一番下に、通告者の氏名と住所に職業、電話番号を記入する欄が当然ながら空白になっているのを目の当たりにして、「本当に大丈夫なんでしょうか？ 実はわたし妊娠中でして、そのもし度々家に連絡をされるようでしたら……」

エイコの隣に座るトモユキが、ごめんなさい、と頭を下げた。

エイコは赤面し、恥じ入ってトモユキを抱きしめてやった。

「わかりました。書きます」

エイコはしっかりとした肉筆で記入欄へボールペンを走らせた。

記入が終わり、トモユキとともに母親の虐待の様子を内からと外からの様子とともに語り、それが済むとエイコはすぐに返されることになった。これからのことはセンターが一手に引き受けるので、エイコに面倒が行くことはまずないという説明も受けた。不安がっていたエイコに女性職員は、あなたのことは秘密ですから、あまり深く心配なさらずにと諭され、恥ずかしさでトモユキへの挨拶もそこそこにセンターを出て行った。

思っていたよりもあっさりとしたものだと思然としていたが、女性職員のいつていた当分センターでトモユキを預かることになることを思い出し、最悪の場合他県の施設で育てられることになる、という一言がどうにも頭に残り、これが最後の別れとなるかもしれないと思うと、別れ際にもっと元気づけてやればよかったと、無性に涙がでてきて、今までどうして、優しく気にかけてあげなかったのか、そう後悔の念にかられ、センターの、肌色の壁で塗られた建物の奥にいる、トモユキの顔がもう一度みたくてたまらなく泣きじゃくり、自分の抱える不安と一緒に涙ごと流してしまいたい心情になった。

心身の疲労はかなりのもので、父との対立さえどうでもよく、母との表面では和む会話を強いられたくないおもいから、二人からあからさまに避けるようにしてさつさと二階へ上がり、古臭く匂う畳にしばらく身体を預けていたら、滲みでるようにムツオの意識に広がったのは、やはりエイコの妊娠と結婚に関連することばかりだった。

明日にでも帰ってしまいたい気持ちから、エイコとの結婚は当分の間見送ってもいいとさえ、ムツオは他人事同然に捨てておきたくなったが、それでも今度こそというつもりでわざわざ実家を自ら訪れたのだから、まだ帰ることは許されないといいきかせ、明日も滞在はつづくところに考えが納まるの見計らったように、エイコからのメールが届いた。

トモユキのことがほとんどで、まるで避けるように結婚の報告の進み具合については触れられてはいなかった。

ただ最後に、早く戻って来て欲しい、と文面とはおおよそかけ離れた唐突さだったから、ムツオはそわそわして、エイコの不安がそのまま文面に乘せられ伝わってきたように感じられた。急かされていることは以前からだったが、今度はそういった裏に隠されたものではなく、素直なエイコの感情が剥き出しだったことに、彼女の追い詰められていることがムツオにも分かった。

早く決めてやらなければと自分を叱咤するほどに、どうにもならない窮屈さが沸き起こる。それが両親との関係から起こる感情の現象であることははっきりしているが、理屈が分かっているからといって、簡単に処理できるほど感情は軽くはない。

大体、結婚の報告なんてする必要があるのだろうか、こんな親にわざわざ許可を得ることなどしなくても、勝手に婚姻届を出せばすむのだ。エイコがしつこく言うから、自分はこんな思いをしている



のだ、メールの返信にはそんなことを書きなぐってやろうかと考えたところで、ムツオは実家の空気を吸っているとまた誰かのせいにしたくなる陰気な気分を変えようと、海岸へ潮の匂いを嗅ぎに行く。満ち潮の階段のぎりぎりまで降りていきそこに座り、海面の底に透けて見える石ころに触れたいが、飛び込むわけにもいかず、代わりにと、小石を叩きつけてみるが、跳ね返りの海水の塩辛さを顔に受け、彼の思い通りの一直線にはいかず、ゆっくり揺れながら沈んでいく小石に気持ちがいらいら立つばかりで、自分と父との関係はいつもこんなものだ、と海面にゆらゆらと映る自分の顔には確かに父の面影が濃くなってきたことを、ムツオも認めないわけにはいかない。

このジレンマから抜け出すためにはふつつの方法ではいけない。この親子関係自体が異常なのだから、それに対抗しうるだけの大胆な行動を、こちらから起こすしか道はない。

いつもの結論に辿り着いたところで、また悩む。空想の中ではとっくに行動を起こしている自分と、未だ何もしていない自分との摩擦がムツオを追い詰めている。

両親の許可などなくても構わない。けれど、式はやろうと考えていた。親に頼らなくてもご祝儀で式の費用を相殺出来る方法のあることをムツオは知っていた。

エイコは式を挙げることには無関心を装っていたが、それが彼女の強がりであることはムツオも分かっている。

それもムツオの側の親類が出席することが必須で、万が一父が出席を拒否することがあればおそらく親類にも気まずさから式への出席を遠慮する者もあるかもしれない。その為なるべく下手にでて、父の機嫌を損なわないようにするつもりだったが、どうしても嘘でも父には頭を下げてくはない思いが勝ってしまい、ただ実家に居るだけの数日を過ごしていた。

海面の表面はゴム製のシートをかけたような光沢があつて、ムツオはつい「ラバー」と呟いてみて苦笑する。

そんなくだらないことを考える余裕がまだあるのなら、もう一頑張りほできそうだ。石階段から腰をあげ、しりについた砂利を両手ではたき落とし、実家ではない方向へムツオは歩き出した。

実家から戻ってきて数日が経ち、ムツオはいつものようにエイコの帰りを一人待つ。

両親に縁を切ることを告げた時の驚いた顔を思い出し、にやついて、指の震えがああの時の緊張感を再現するようだった。

夕食を済ませ、風呂にも入り、後は寝るだけだったが、まだ冷めやらぬ興奮からムツオは寝つけずにキッチンでエイコの帰るのを真剣に待つわけではなく、テーブルの上に頬づえをつき、テレビドラマを、内容もわからずただ画面を中心に周辺を視点の合わないまま、他の考えに忙しくしていた。

エイコが玄関の扉を開く。声の調子で機嫌はいいらしい。歩幅の狭い歩き方は床を小刻みに揺らす。ムツオに気づき、ご飯はどうしたか訊く。そう、もう食べたの、せっかくお弁当買ってきたのに。ムツオが、明日の朝に食べるから置いてくれと言う。

「え、朝から天井たべるの？ うそでしょ？」

途端に天井を食べる自分が想像できなくなった。捨ててしまえばいいだろ。ムツオは自室に向かう。

「なに、なんで怒ってるの？ ばかじゃないの、このアホ！」

はらいせにムツオは激しくドアを閉める。雷のうなりに似た音に続いて全ての音を遮り、ムツオは耳鳴りのするのを、耳の穴に指をつつこんで掻きまわす。ごわごわした指触りの悪い耳の穴は乾燥していた。ムツオはさらに奥へ指を進め、うす暗いトンネルの中で風に吹かれる自分を想像して、濃いオレンジ色の照明の下、速度をおとさず通りすぎるトラックの風圧によるめき、後ろから来る車に撥ねられはしないか怯え、できるだけトンネルの隅で肩を擦らせるよ

うに慎重に歩いていく子供の頃の体験を思い起こしていた。

壁に持たれ聞き耳を立てても、となりの部屋からは物音ひとつ聴かれない。

実家にいた時に、エイコからのメールで、ムツオはトモユキが母親の元から逃れることがようやく出来たことに安堵し、トモユキと同じように、父から逃れる為に自分が起こした行動を重ね合わせ、これからお互い親というものから本当に抜け出すことが出来るようにと願った。

平日の仕事休み、なんとなく居心地のわるさから、壁を殴りつけたり、蹴りつけたりしていたのをもしかすると、トモユキはおびえながら聴いていたのかもしれない、とまだトモユキが不登校だったことを知らなかった頃にやった自分の子供じみた行為に恥ずかしさが湧きあがり、いま同じことをしてやろうかとかるく壁に拳をあてたが、いつかの母と子のやりとりを思い返し、そつと拳を柱に当てるだけで止めてしまった。

学校へ行かずトモユキは漫画本を読んでいたところに母親が帰ってきたのが口火になった時、へたくそなヤツだと、ムツオはその際のトモユキのあわてぶりや失態の様子が目にうかぶようで、いつものように壁に耳をつけていた。

意味はわからなかったが、教師がどうのこうのと母親はわめき、ムツオには想像のつかない、親子の間だけの出来事のある一場面をとりあげトモユキを非難する、その話の節に父親らしい男の名前が母親の声からもれ、それで事態が彼女の離婚間際にまで遡っていたことに、ようやくムツオは事情をのみこめた。

無差別にトモユキへの不満ばかりを気違いのようにわめきちらす母親に、しだいにムツオはまるで他人ごとではないかのように腹立たしく聴いていて、いつのまにか立ち上がり壁に向かい合い身構える自分の行動に気づくと、突然に、持病の発作でも起こした人のような息苦しさに、声にならない唸りをあげ、固く拳を握りなおし、壁に憎しみや怒りのすべてをなすりつけたいとばかりに叩きつけた。

奥の部屋から驚いたエイコがドアを開けると、一度は畏縮しひるんだものの、背後におそろおそろ近づきながら、ムツオやめなさいって、と彼の怒りも最もだと共感し、背後から抱きしめてやる。

エイコはムツオが、トモユキを幼い頃のムツオ自身と重ね見ていたことを理解していた。彼にとつてはトモユキは過去をやり直す為の大事な要素であることを、むきになってトモユキの臆病さをなじる様子からも想像がついていた。

利き腕の拳にはまだ大げさに、厚く包帯が巻かれ、それでも骨折はしていなかったのが幸이었다。

エイコに言われ、念の為に病院へ行った帰り、思い立ち、事務所に辞めることを伝え、次の日から仕事には行かなくなっていた。タカアキとも一度電話で話ただけで、それっきり会う機会も得られないままだった。

ムツオは、まだエイコの両親に会ってはいなかった。もともと、エイコの両親には、彼女から妊娠のことを告げて、エイコの父親は何度もムツオを連れてこいと息巻いていたが、自分からムツオに会いに来ようとはしなかったので、未だに良い進展もみられなかった。隣の住人は引っ越していった。それはエイコがうわさを広めたわけではなく、下階の住人である中年のおばさんと、その母親の婆さんが、トモユキの体の痣や、夜に度を超えて叱ったりしているのを、ムツオたちが越してくる以前から不審におもっていたところに、トモユキの姿が見られなくなったことからアパートの他の住人達に憶測でうわさを広めていったためだった。

うわさがトモユキの母の耳にも入ると、さすがに母親も居づらくなったとみえて、トモユキが居なくなってから一ヶ月経った昨日、逃げるように住人への挨拶もなく出て行った。昨日ムツオは一度も外へは出なかった。

あの母親と顔をあわすのがためらわれ、引越し業者の階段を昇り降りする足音が消えるのをどれほど心待ちにしていたことか。その際にムツオの部屋の玄関が、ガンツ、と荷物を業者が当てたのか、すぐにムツオはあの母親のしわざだという考えをどうしても拭えないで、悶え苦しむ長い一日を過ごした。

エイコは仕事を休んでいた。どうせ派遣の仕事だからと軽く流しまだそれほど目立たない腹をさする。それはムツオへ見せつけるように、慎重に、丁寧になでていた。

拳のけがが治ったら別の働き口を探し、エイコとの結婚もしつかり進めていこうと内心おもっていたが、まだそれは彼女へは伝えていなかった。態度で示していけばいいのだからという考えと、結婚は自分のためにするのであって、その決意の中にはエイコの存在は重要なのかどうかムツオ自身わからないままでは頼りなかったからふせておくことにしていた。

ムツオはこのところ、壁を向こうから叩く音や、女の叫び声の幻聴に悩まされ、深い眠りの心地良さを得ることができなくなっていた。

感情の起伏がはげしくなり、ちよつとしたことに執着して誰にあたるでもなくひとり怒鳴ったり、殴ることはなかったが、その代わり壁を蹴って気を静めるムツオにとまどいながらも、エイコはあきらめたように彼との結婚にはわずかな異論も唱えることはしなかったが、産まれてくることはたえず二人の気持ちに苛立たせ、お互いに相手の体に触れることを避け距離をおき、性交も忘れた過去のもの同然になり、ムツオだけは時々湧き上がる性欲を自慰で済ませ、衝動が来なくてもいまはそれを自分からおこなうようになっていた。

狭い居間に置かれた、二人かけるともう窮屈になるソファの片側で、足を組み、昏々と額で空を打つしぐさをくりかえすムツオの姿を一瞥してエイコは、風呂場の天井にへばりつき、我慢強く落ちてこよつとしない水滴を思い浮かべ、最初の時はかくく微笑むが、何度も自室の寢床へ向かうようにすすめても、その度、うん、うん、とほとんど唇を使わず、口から漏れる呻きのような、手応えのない返答が帰ってくるだけで、しまいには、なにがなんでもといった類のむきだしの衝動にまでつかれ、今度は語尾を一段強くした。

「……しつっこいな、わかったっていつてるだろう」

まだ眠気の名残惜しいムツオが、起きるきつかけに両腕を頭上でいっぱい伸ばし、憎さまじりの大あくびをしてみせれば、エイコもおさまりがつき、元の緩んだ表情で、片側のソファの肘かけに手をのせ、彼女の目下にあつた心配事が一つ解消されそうな様子に、晩飯の後片づけを台所へいつもよりだいぶん遅れてはいたが、腰を上げる。

エイコの背に、二、三咳込んだムツオがしきりに「がつ、がああ」と喉を振るわせ風邪の前兆だと説明しながら、さらに、「がつ、がああ」と続ける。

「おれ、風邪のはじめには決まって喉が腫れるんだよ。だから喉の奥がかゆくつてしょうがない」

「だから言つたのよ、全然聞いてないから。あ、喉のお薬ってまだあつた？」

「いや、分らない」

「だめよ、ちゃんと飲まないと」

「薬箱ってどこだっけ」

洗い物を中断し、エイコは布巾を手に電話台の引き出しの一つに視線を遣り、近寄ってくるムツオの気配を背後に認めつつ、電話台

の前で屈む。すぐに海苔の缶を掴み、蓋を開けると、中には絆創膏、包帯の一巻き、目当ての風邪薬が覗け、封を切った箱の中に指を挿し入れ、中身の有無を確かめる。

「あつた。ふた袋あるから今日と明日の朝で飲めるわよ」

薬を手渡し満足気に、再び洗い物へとりかかるエイコに気安く礼を言い、明日薬局へ寄って行こうか考えながら、ムツオは風邪薬の一袋を片手にソファへ腰を下ろす。

洗い立ての、内側はほとんど濡れているコップに水を注ぎ、エイコは外側だけをさつと拭き、ムツオが座るソファの前にある、足の短いテーブルの中央へ無雑作に置いた。

あらかじめ袋の口を開け用意しておいたムツオは、粉末状の風邪薬を含くみ、コップを握り半分まで注がれた水を流し込むのが難しそうに、しかめ面で口内へ入れ、舌の先に苦味を感じられたのを合図に、それらを一度で飲み尽くした。

喉の痒さも治まるほどの苦さだとムツオがいうと、エイコが愛想よく頷いてみせた。その、手際よく洗い物を終わらせ、今、布巾を絞る後ろ姿が、ムツオに或る不安を抱かせた。

そつなく洗い物を済ませたエイコが、思いついたように眼を輝かせ、冷蔵庫の扉をひらき、

「梨があつたの忘れてたけど、食べる？」とまだ舌に薬の苦味が残るムツオに訊いてはみたが、やはり彼女自身食べたいらしく、返事を待たずに皿から一つ取り出して食べ、そのまま皿ごとムツオの隣へ腰を下ろした。

「甘い、良かったあ、美味しい梨に当たったわ」

指先につく汁を丁寧に舐め、さらに手を伸ばすエイコの無邪気さを、横で眺めていたムツオが、梨の甘いことをあまりにも褒める彼女に対して、ちよつとした発見でもしたみたいに、ニヤついた顔をして、こう教えた。

「柿の甘さは専用の機械で判別がつくらしいから、最近の柿にはハズレがないんだって」

足場組みの仕事を辞め、次の仕事の当てもない状況下にあったムツオに、親戚の厚意の申し出から、伯父の経営するブドウ園の手伝いをしきりに勧められ、夏の間だけという約束で始めた頃に、お客同士が話す内容から得た、果物に関するちょっとした知識をふと披露してはみたものの、それで生計を立てていくことは躊躇われ、できれば前職に近い仕事を考えているムツオの胸の内には、なんとなく情けない思いだけが残った。

「へえ、どうやって？ 梨はできないの」

底の浅い皿に八等分で切り分けられた梨がエイコによつて順調に減らされていくなか、ムツオはまだ梨に手をつける気にはなれないでいた。

「スイカはどうなの？ スイカで出来たら一番いいのに」

「柿が判別出来るんだつたら、スイカでも……」

でも、今夏に実家で食べたもののなかには、確かに大味なスイカもあつたなど、この時期にずいぶん季節外れな話をしている自分たちの行き先も、この話の結末のように形を留めずに済ませる方法はないのか、ムツオはまたいつものように思索しあぐねて頭をかく。

「まだスイカでは無理じゃないのか、梨だつてまだ全部が甘いわけじゃないだろう」

「そうね。でも、この梨本当に美味しい」

ムツオの妥協案にあつさりと応じる態度を示しても、やはりエイコにはその奥でまだ彼の意見には応じかねる何かがあるようで、手にした梨に関心を寄せたまま、振り向かずになんか答えた。それから、半分残った梨を最後にもう一度ムツオの前に持って行って、また拒まれるとすぐに引き下がり、指についた汁を気になげながら、冷蔵庫の扉の奥に皿をしまいこんだ。

エイコが洗面所へ行き、ひとりになったムツオは、全身に強く熱を帯び、額から波紋の広がりのような血流の脈打つさまが、眼を閉じ今は一切の抵抗をやめた彼の脳裏に展開され、このままここで寝てしまおうかと思わせる誘引も含まれた、心地良い、酔いのように



もある熱い血液のうごめきを体内に認め、それもすぐにあまりよくない兆候だとばかりに荒っぽくソファから上半身だけ起こし、風呂場から漏れ聞こえてくる、激しく水しぶきのはじかれる音に、ムツオの意識が流れるなかで、似たようなざわめきの内に潜んでいた頃の自我が肥大する一方なのに、ムツオは拒絶を覚え、ざわめきにひたることもままらなくなってきた。

意識がソファの上に再びもどり、瞼のかゆみから、指の一本を目元にもってきたところで危うく擦りそうになる寸前でやめ、昨日自らの過失から眼科を訪れることになった際の、診察室での出来事を思い返してみた。

ムツオは最近、運送会社の、積荷のアルバイトをしていた。季節の変わり目で、徐々に集積所を行き来するトラックの回数も増えてくるのだが、その時期の忙しさにのまれたムツオは、トラックの荷台に載った段ボール箱を不注意から落としてしまい、幸い中身は割れ物ではなく、セール用の婦人服で、それをまた整え、詰め直す処置を施せば済んだ。

しかし、そのすぐ後におなじ失敗を行い、今度は女性用のブーツが入ったダンボールの予想外な重みに耐えきれず、それごと地面へ後ろ向きに倒れ、その時ダンボールの側面で瞼を痛め、そのまま眼科へ向かうはめになった。

ムツオはその眼科においては初診であり、受付の若い女性から手渡された質問用紙に従順な態度で記入して、それを済ますとしばらく待たされた後、簡単に名前を呼ばれ診察室へと通された。

彼の見たてではまだ二十歳くらいに映る、受付に立つ、女性というよりは、まだ女の子といったほうが似合いで、小さいつくりの全身を上方にたどれば幼顔が印象的な、二重がはつきりと大きくひらいた眼元から反り返る長いまつ毛が愛玩の気持を生む、ムツオ好みの受付の女性から、自分の仕事を忠実にこなそうとする時に認められる、ぎこちなさのようなものを見つけ出すと、さらにムツオの心は惹きつけられ、彼のほうでも、やさしい母親のいいつけを守る

こどものような、彼女への好奇心とうちとけたい思いから、ほとんど受付の女性のいいなりになっていた。

中年の男性医師が彼の診察を行い、そこから少しさがったところにいた彼女に目薬を出すように指示を出したので、そのまま彼女は奥の部屋へひっこんでしまった。医師が一応点眼のやり方を指導するといふのでいちど席を立ち薬品のある部屋へ入っていった。そのまま診察室のイスにたよりなくすわり待っていたムツオの元に、意外にも受付の女性が目薬を手にして現われ、正面に立ち、「失礼します」と上から覗き込むようにして、まずムツオの右眼の瞼に指先をかけ、おぼつかない手際で上と下に指を伸ばしながら眼を開かせ、顔を上げるようにとムツオの頭に手をかけ言った。両目に点眼を終え、ティッシュを手渡し彼女がなにか言ったが聴きとれなかった。

診察室の開放された扉の奥から別の患者が入ってきた。ムツオと入れ替わりに眼帯を付けたスーツ姿の男が診察室のイスに腰掛けると、彼女はもうその男を構うことに懸命な様子で、扉の前で一度振り返り、彼女へ簡単な礼を言おうとしたムツオの姿には気づかなかった。

ムツオは黙って待合室に戻り再び名を呼ばれる間、彼女の指が冷たかったのを、それは彼女から受ける好印象とは一点だけ不釣り合いなものだと考え、そのことで彼女の全体が悪くなることはないけれど、そこに確かな、生々しい彼女の体臭を嗅がされたような、突き放された失望を捉えた。

そこで、できるなら良い感触を微かにでも留めたいと願いムツオは、彼女のしたとおり、ゆっくりと撫でるように瞼のうえで指先を滑らせ、彼女をもう一度再現したいとばかりの熱心さをもって、慎重に彼女の良さを保とうと、大切にその感触をたどるが、どうにもそこへは行き着かないから、浮揚もしてこない。

ただ不思議と女性の指先の動きが、なんとなく幼児のそれと似ているようで、むじゃきに大人の顔を柔らかくたたき、生まれて間もない幼児の、はちきれんばかりに膨らんだ掌が、いたずらっぽく笑

い、繰り返し彼の頬を弾くのを、はじめムツオはすこぶる穏やかな心境に落ち着いていたからそれほど気にはしていなかったものの、さすがに肩まで揺すられると、つい、その指先を掴み、だれか自分の名前を囁く声の源へと意識が向かい、それが風呂上りの湿った肌から芳香を漂わすエイコのものであることを、ムツオが気づくまでにはたいして間はなかった。

またソファで眠ってしまったムツオを、すでにパジャマ姿に着替えたエイコが、風呂へ入るようにとせきたてる様子が目に入り、ますます熱を帯びてきた自身の全身を覆うけだるさが、ムツオの風邪をひどくこじらせてしまったことを教えていた。

「……ねえって、お湯が冷めるから、入らないんだったら、栓、抜いとくわよ」

おどしにも近いその言葉はムツオをたちまち不愉快な気持ちにさせた。エイコが、彼になにかを期待した場合の言い回しは決まってそういう思わせぶりの調子で、ムツオに迫ってくる、逃れられない責任をつねに暗示させる形に加工し、内に隠された皮肉となって囁かれ、次の時には強く主張され、その場合、ムツオは消化しきれずいつまでも腹に溜めたまま、据えかねる態度でエイコを哀れっぽく睨むだけなので、それだけでは、この男に事態を良い方向へ進めようとする意志があるのかどうか、エイコには解しかねた。

その後、目にみえて事態が好転したわけではないが、今までにはなかったメニューが食卓にのぼる近頃を、ムツオはどうしても素直に喜べず、疑わずにはいられなかった。トモユキのことがあつてから、エイコは以前にもまして強気になったように思われた。

「朝入るからいいよ」

「だめよ、残ったお湯は洗濯に使うから、いま入って」

エイコの声を捨てておき、体の向きを変え、背もたれに顔を埋めて、あくまでソファに居据わろうと粘るムツオの頑なな姿勢がひどく場違いなことだとエイコは説いた。当然ムツオへの挑発の意味もあった。

しかし、そういう挑発にはのらないことが今の場合の得策だということもわきまえていた、そのムツオが、いきなり怒鳴った。

「もう、うるさい！　だまれ！」

分かっている、考えている、言うつもりだ……、その先が続かない。後悔が起こる。エイコがはつきりとひとつに定まった迷いのない顔つきを作った。

周到に持論を展開させようと待ち構えるエイコの様子は、ムツオの訳のわからない憤怒をもともしない、正論を盾にとる人の無慈悲さそのまま、わりに道徳を重んじる人間と自己を称するムツオは反論もできず、いいようになじられっぱなしだった。反論を試みるのは無駄なことだと、経験からあきらめに至っていたから。

エイコがやりきれないのも当然だ。でも、都合のいいようにおれだけ非難するのはちがう気がするけど、それを訴えれば、よけいにひどく罵られることは、はつきりしている。

まだなにかわめくエイコを、ようやく視界に確め、ムツオは自分特別に備わった体質のことを思い出す。

嫌なことが起こる度に耳の聴こえが悪くなり、視力の低下が著しく、眼球に靄みみたいなものをかけ、いつの間にか意識を遠くへやってしまう特質をムツオは身につけていた。無駄とおもえる経験からさえ、なんらかの学習を試みる、脳の抜けめない働きに、ムツオは、ただ驚かされ、ありがたがっていた。

あらゆる不満をエイコが抱え悩む日々を、ムツオも認めないわけにはいかず、だからこそ、こうして我慢を重ね、罵倒にも思慮深く寛容に彼女の不満のはけぐちをこなすのだ、という自負がムツオには有る。

もともと、そういった場面では、男が女以上に喋ることは禁止とされていた家庭では、ムツオの幼少時は、家全体が父親の思惑に包括され、ここでも、はばをきかせる父の教えが、ムツオの気持ちの流れとともに、うつとうしく纏わりつく。

「ねえ、わかった？」と、エイコのあきらめを示す言葉にムツオ

は、彼女を再び現実の存在とする。

「もういい、わたし寝るから。でも、部屋の照明は消していくからね」

扉に手をかけ、もう片方の手は、証明のスイッチをはじいた。

「えっ」

ムツオは、一瞬のひどくたよりない淋しさから、そう叫んでいた。「何なの」とエイコが、暗闇で、スイッチを探る気配に気づき、それを遮った。

「いや、点けなくていい。ここで眠るから」

「そう。おやすみ」

暗がりの奥に姿を潜めるエイコの遠慮ない、静寂を掻き乱す足音がやがて止まり、寝室の閉められ、それきり冷蔵庫のハエの羽ばたきのようにうなる振動を聴くだけになると、ムツオは俄然、思考が働きはじめ、頭の内側にむずがゆい感じを覚えてきた。

それは、ちょうど、ムツオの友達に子供が生まれたことを、その友達の口から聞かされた時のむずがゆさに似ていた。

その友達は、二十歳そこそこに恋人と同棲を始めると、間もなく恋人をこえた関係に納まり、それよりもやく、赤ん坊の種を、恋人の中に植えつけていた。ムツオの仲間うちでは、そういうことは、なにも特別ではなかったから、ただ、形式上の言葉はかけたが、心のそこからのものではなかったことは事実だ。

頭が、むずがゆいと感じたのもその時だった。どっちつかずの微笑を浮かべた友達の表情は見るに堪えがたく、淋しさを滲ませたその笑顔に、ムツオは友達が洩らす喜びの言葉全てを信じる心境には至らなかった。

ムツオは慎重に腕をのばし、ソファの位置を確めゆつくりと体重をかけていく。クッションがしだいに沈み、きしむ。そこには病人がベッドによこたわる時のような、弱々しさがあつた。

ここまで風邪をこじらせたなら、もはや眠りこむだけだと、ムツオは心臓の鼓動を注意深く聴く。そうすることで、よく彼は寝入ることに成功していた。

幼少からの習慣は別の記憶も呼び起こす。自らの脈を追いかけて、数える。ある回数まできたところで自然に、ムツオはそれをやめた。三十八度を上回る発熱でなければ、ムツオの父親は病氣と認めなかった。ムツオは学校へ行った翌日に風邪を悪化させ、そこで、ようやく認められ休みをもらうことになる。一日で治らなければ、もう一日は休んでもよかったが、三日休むことは許されなかった。当時、親しい友達が四人あり、盲腸の見舞いに訪れ、ムツオをしきりに外へ連れ出そうと説得を続け、ムツオも、そろそろ行つてもいいかという気になっていたので、友達の家へみんなで向かうことになった。

ムツオは友達のひとりの自転車を借り、ほかの四人は歩いてしたが、そのうち自転車を降り、皆とともに荒い砂利道に行く。

途中、砂塵が顔を強くかすめ、ムツオと仲間らは唇を舐め、舌にざらついた感触を覚えると、一斉に地面にむけ、数回、つばを吐きだした。

友達の家とは違うお寺の閉ざされた大きな門の正面に着き、そこでひとりが、自分はこの寺の住職の奥さんを一度見たことがあると告げ、ひとりは、まだ見たことはないかと嘆き、ひとりは見たとも見ないとも言わずうつむいたままで、ムツオともうひとりは、まだ見たことはないが、いつか見てみたいと好奇心から、目を輝かせた。

友達は、ムツオともうひとりに、おまえたちはいつか見るこ

できるだろうとやけに偉そうな口調で、嘲笑まじりに、でも、気をつけないと住職に怒鳴られるぞ、と彼自身住職に門の前で呼び止められた時の、恐怖をあらわし、肩を小刻みに振ってみせた。

その帰り道にムツオと友達のひとりは家までの道を競い合って走った。ムツオは近道をするために茂みの深い林道を通ったが、ムツオの白いセーター一面に小枝がひつつき、神経質にそれを取り除こうとするのを見て友達が、服に小枝がつくのは馬鹿だけだと言い放ち、自分にはひとつもつかなかったと自慢した。

ムツオが小枝をあらかたとり除いた時には、白いセーターはどころころほつれ、灰色に濁った汚れができ、ムツオはそのセーターを気に入っていたものの、脱ぎ捨てた。

ムツオが玄関の扉を開けると、母親の妹がこどもを連れてきたことを、見慣れない靴から見てとった。

居間の畳にすわり、テーブルの上にはコーヒークップが二つ置かれただけで、ムツオは、こんな暑い日にわざわざコーヒをださなくても不思議におもい、額の汗を拭いながら、冷蔵庫の麦茶を持ちだして飲んだ。

叔母さんが母親となにか難しい顔で話している。ムツオに気づくと叔母さんが、この子のお守りをお願いね、と千円札を手渡し、ふたりは、デパートに買い物へ行くただけ言い残し、家の中はムツオといとこのタカコちゃんだけになった。

最初ムツオが馬になり、タカコちゃんは彼の背中の上ではしゃいでいたが、ムツオがひざの痛みを訴えると泣き出し、タカコちゃんは癩癧から、その辺の小物を掴み投げはじめ、ハサミで、ガラスが割れ、コーヒークップがムツオの額に当たり、ひどく腫れ、赤い血が滲み、かとなったムツオが、叔母さんのこどもだから叩いたりしないんだからな、とタカコを口で叱りつけ、それでも治まらないくて、タカコをその場に残し、また玄関から外へ出て行った。

自分は悪くない、叔母さんもわかってくれるだろう。ムツオは樂觀した。

外に出ると、タカコちゃんももう少し物分りがよければ優しくしてあげるのに、ムツオはそれをひどく残念に感じた。

家を出てすぐに、買い物帰りの母親と叔母さんに呼びとめられ、母親が、タカコがあなたに傷つけられたと言っているけれど本当かと訊ね、ムツオはあわてて否定する。叔母さんが、タカコから血が出ていることをつけくわえ、ムツオは、それはおかしい、傷はぼくの体にあるはずだ、と額に手をあてたが、痛みも腫れもなくなっていた。血も出ていないみたいで、ムツオは安心してしまい、それ以上反論できなくなってしまう。

「とんでもないことをしてくれたな」

母親が激しくムツオをなじり、何度もムツオの側頭部を買い物袋から出した物差しで叩き、しだいにムツオは、タカコを傷つけたのは自分なのかもしれないと思いはじめた。

ムツオは父親の作業場へ向けて歩いていく。作業場からは金づちで鉄を殴りつける連続音が鳴り響き、中へ入るのを躊躇していたら、作業場の隣に住む、糖尿病を患っているらしい、肥満体の中年男が、幼い娘を連れてムツオの前まで来て、作業場のドアが閉めてあるのをちらつと見やり確認した。

「お父さんは在宅かな」

「はい、仕事が忙しいみたいです」

肥満体の男は、ムツオの言葉に頷くと、君の父親は大変忙しい人で、それもあり腕の立つ職人だと褒め、「君もああいう父親をもつて満足だろうな」と言われムツオは、父親が尊敬すべき人を感じられ、男の言うことを素直に嬉しいと感じた。

男だけが作業場の父親に招かれ、ガラス戸の奥で愉しそうに笑いあっている姿が見られ、残されたムツオと、女の子は、人目につかない作業場の裏手に行き、そこで、ムツオは、まったく抵抗しない女の子の唇に好奇心から、不器用なくちづけをした。

空き缶が転がる音に、はっと唇を離す際、ムツオのものか、彼女のものか、唾液が細く糸を引き、首を振ったムツオの頬に生温かい



線を刻んだ。その線はやけに熱かったが、ムツオにとって、汚らしいものにはならなかった。今更ながらに女の子を注意深く見る。

長く垂らした髪の毛に隠れさつきまでは気づかなかったが、女の子はつりあがった一重まぶたで、唇も薄く小さい、あまりかわいいとは言い難い顔をしていた。

はじめにどうして気がつかなかったのか、もしかすると別の人物にすりかわったのかなとも考えたが、たいした問題にもせず、それより、もっとその女の子と親しくなりたい気さえ起きた。

裏手にもガラス戸はあり、そこから父親の背中が見え隠れするのをひどく恐れ、女の子の手を握り、ムツオは、海岸へ向かおうと思ひ立ち、もうすでに外灯のともる、夕暮れをとくにすぎた家並みに沿って海岸へ向かい、手をつないぎ歩く幼いふたりを、いつの間にか大人になったムツオが後ろからじつと眺め、二人の姿が夜の暗がりに消えてしまうまで、そこにいて見守り続けた。

港のそばの海岸では半分消えかかった焚き火の白煙が、その源から上空へ広がりがつつ昇るのを防波堤越しに確かめ、幼いムツオは人の存在を予期させる白煙の焦げたにおいが女の子を不快にさせてはいないか、それが気にかかり、鼻先で軽く手をばたつかせ振り返ると、女の子はすばやく石段を五つ降りて砂浜の焚き火のまえに身をかがめ、暖をとるように両の掌をいくらか弱まってきた火種に向け彼のことなど忘れているふうな、先程までの警戒を取り除いた、少女の微笑さえ浮かべているのを、ようやく幼いムツオが走りよりおなじようにかがみ、曲げた膝のぶつかり合う距離にきて、女の子の顎に手をのばす。

微かな抵抗を指の間に感じ、ムツオは多少むきになり、女の子を力ずくでもこちらに向けさせたく肩のあたりを数回叩き癩癩でも起こしそうな勢いをみせた。

父親の呼ぶ声が聞こえ上半身をひねり女の子はすぐにムツオのもとを離れ駆け出し、石段を昇りきったところの父親のたるみきつた下腹に鼻をうずめ、小声でなにか言っているのが、ムツオに都合の

悪いことを告げ口しているのではないかとこわがらせ、もし父親に訪ねられたらどう切り抜けようか、姑息な考えをいろいろめぐらせては、はたして大人の理知に通用するものかうたがわしく、適当な答えもだせないままいるうちに、女の子はさつさと父親に抱きかかえられながら防波堤の後ろに身を隠してしまった。

立ち上がった女の子を追いかけようと焚き火からすこし離れた場所に茫然としていたので、しだいに寒さが肌に感じられ、ムツオはズボンのポケットに手をつっこみ、小銭のいくつかに当たると、掌の上に置いて数えてみた。

百七十円と一円玉が六つだけで、一円玉を数えた時、なぜかここまで数えるのはひどく情けないと自分を恥じた。この小銭を使いきったらどうやって生活すればいいのか、不安は最高に達した。

唐突なかたちで女の子と別れたくやしさと手持ちの金のたよりなさことから、ムツオは狂ったように砂を蹴りつけ、焚き火の白煙を種火ごと夜空に散らした。

火が消えた瞬間にムツオはいきなり寒気を肌を感じ、鼻腔にこそばゆく刺激を与える浜風の冷たさに堪えきれず唾液ごと派手なくしやみをふきだすと同時に大きく体勢をくずし、おもわず片手をついた先の柔らかなソファの沈み込む手触りに、重力のあることを今思い出したかのような息苦しさが全身にのしかかってきた。ムツオはいつのまにか器用にソファの上でうつぶせに体をいれかえ、枕代わりのクッションによって息苦しさを引き起こされたことを理解した。

クッションから顔をひきぬき、呼吸さえもたった今はじまったのかというほど、深く、長く、胸を前後になんとも動かしながら、ようやく暗闇の中にぼんやり視界が開けてきた。

まだ眠りのふちを行き来する、不確かなムツオの脳が、窮屈な体勢でソファに体を詰め込んだ格好の体の節々に痛みを伝えてくる。

寝室のベッドで寝入っているはずのエイコが、ドアを開け、なにか抱え暗闇の中を正確に彼のいるソファまで来たところで、毛布を

一枚無造作にムツオの膝もとに落としていった。

「もう今日はここで寝なさいよ」

ムツオはもとからそのつもりだとなんとも言っていたらうと、命令口調のエイコを軽くつきはなすつもりで毛布を蹴りあげてみせた。

「なによ、それどういう意味。あんたって本当、わがままよね。自分のことしか問題にないみたい」

「だから連れて行くって、そのうちに」

「明日よ、行くなら」

「風邪ひいて無理」

それなら病院のあとにでも構わないから連れて行ってよね、先延ばしにはさせないから。

そう頑なに彼女は、明日自分の実家を訪れることを強要した。

ムツオは車の運転ができそうもないことを理由に拒否したが、すばやくエイコは、わたし、まだ運転はできるから大丈夫、心配はいらないから。

まだぼんやりとしかおたがいの顔は見えないのに、それでもエイコがしてやったりのにやけ顔をする様子が、まざまざとムツオの眼に浮かんできた。

くやしいけど、眠気を振り払えずにいるおれの発熱で弱りきった頭では、こいつの執拗なやり方に抗うことは難しい。いつそ今日のところはなんでもいいから約束だけ済ませ、明日また理由をつけて先延ばしにすればいいことだ。なにもこんな状態でわざわざ疲労の種を増やすこともない。せつかく毛布までくれたのだから、望みどおり今夜はこのまま眠るとするか、などとムツオが半ば投げやりな考えを起こす間も、エイコは立ち去らずそこに止まり見下ろし、まだなにか胸のつかえがありはしないか思索するようでもあった。やがて何を言おうか固まったらしく、

「必ず連れて行ってよ。まず教会に寄って……」

ちがう、病院、病院に寄るの。そのあとに実家に行くからそのつ

もりでいなさいよ。

エイコの顔は暗闇の中、わずかに紅潮したように、ムツオには想像された。そのちよつとした言葉の間違ひは、現在のムツオにとつて非情な文句の破片を、不意打ちで切りつけるような、はつきりとした印象をもたせる効果が充分あつた。

来た時と同じ正確さで歩き、寝室のドアを前ほどの力をこめずに閉め、ムツオの耳を煩わす音は聴かれなかった。

それでもまだ、ムツオは考え渋るのをやめず結論に至ろうとはしなかった。どうしても、エイコを連れて彼女の実家に帰ることに同意しかねた。

行き詰まりになつたムツオは、エイコの持つてきた毛布を空中ではばたかせ、全身を覆うように包み、毛布の端を内側に折り少しでも温もりが逃げないように、ソファと体とでしっかりはさみこんだ。彼女の出産、結婚、そして家族としての生活からは逃れられないことが、ただはつきりとした形で存在が確められるばかりで、ムツオはもう眠ることができないほど意識がさえ、エイコの胎内で確実に成長しているものが、自分のこどもであることが実感され、ムツオは行き詰まり、みないふりをつづけることができなくなつたいま、逃れる方法は死んでしまうやり方だけだ。

そう考えが固まるにつれ、でもなんだかんだいいながらも、自分は生きてエイコとの結婚をするのだらうという予想は、すでに思考の隅でふくらみを増していた。

もう自分にはのしかかる父の圧力はないのだからと、友人の職場を訪ねた際のことを思い出し、縁を切ることは法律上では不可能で、例えば、分籍といつて両親と戸籍を分けることは可能だが、分籍の済んだ後でも、結局は親の扶養義務はついて回るし、あまり法的には意味のないことを、淡々と友人に教えられた時の自分の浅はかさ、に恥をかき、結婚すればおのずと籍は別になることもその時に知つた。

せつかく考えた会心の策も、これでは両親の目を覚ますことはで

きないかもしれないと諦めながらも、友人に背中を押され、おそわった通りに、扶養と相続権の拒否をするつもりがあることを二人に告げたところで、父親も表情を変えた。

なにもそこまでしなくてもと母親と一緒にになって父親がムツオを諭すが、もう彼の気持ちはうわの空で、慌てふためく父親がおもしろくつて、もつとこらしめてやれといった思いで、とうとう籍を分けることを承諾させた。

それから結婚式にも出席させることも、父親は世間体を気にしてだろうが、約束してくれ、年明けに小さな式場だが予約もとれた。父親の恨めしそうな困り顔は爽快だった。母親はようやくこの重大さに気がついてくれたらしく、そこまであなたがお父さんを嫌っていたなんて知らなかった、と泣き出し、取り乱しうは父親までもあわてさせるほどだった。

さすがにムツオも母には刺激が強すぎたと後悔したが、それでもしなければ自分の心を理解してはくれないだろうと割り切ることに決め、態度を崩さなかった。

あとは、エイコの両親に会うだけだったが、母親は自分のことを嫌ってはいないらしいが、父親が大事な娘にはムツオのようなだらしのない男は不釣り合いだと憤慨していると聞かされてから、またムツオは臆病になっていた。

ようやく一応のケリのついた親子関係の後にあったものは、義理の父との確執かと、またも彼の頭を悩ます問題が起こり、ムツオはどこまでも逃げてしまいたくなる自身の性格を恨めしく感じ、どうすれば堂々とした人間になれるのだろうかと考え、やがて熱の増した頭は疲れ果て眠りにについていった。(完)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0752e/>

---

ご懐妊

2011年9月11日03時23分発行